225
R17

始

225
R17

美術叢書

印度太古史

著 ラプソン
譯 山下祥光

東京
向陵社
發行

大正
5. 3. 20
購求

序

回顧すれば十有五年の昔となりぬ。おのれ巴里に在りし時、佛國人が「巴里は天下の美をあつめたる處、ルーブル博物館は巴里より更に多くの美をあつめたる處」と誇れるを聞き、幾度か尋ねゆきたりけむ。されども一たび二たびは、たゞその廣大なるに驚き美麗なるに驚き、恰も百花のさきそろへる大野を行きめぐりたるが如き感ありき。五たび六たび十たび二十たびと重ぬるまに〳〵、やうやうその色目の異なる點をも見出し、この道をたどりゆく人々にも問ひ質すばかりの手づきを得るにいたれり。さて後は系統を

たて標準を定めて見きはむることゝなりて、一たびは一たびより感ふかく、その道ならぬ我が身も立去りがたく思ふものゝみ多くなりぬ。さてはいよ〳〵愛着つきて、この國を離るゝ時は、愛子に別るゝが如き心ちせられざりしにあらず。

さて歸りて後は、かゝる品々見るべくもあらねばたゞ小さき畫板に其のおもかげを偲び、または閑なる書窓にもたれ、雲山萬里をかけて冥想するのみ。

さるをこの頃蘇武文學士外數名相圖りて「世界美術史刊行會」と云ふを起し、希臘羅馬は更にもいはず、印度埃及の古きものに溯り、又はもろこしの昔より我が大御國の名あるものゞもをえりこ

このへ類を分ち系を正して刊行し、汎く世に頒たむとすることて、おのれにもその賛助をもとめらる。おのれもとよりこの道にはさとり淺きものなれども、かゝるたやすき方法にて世界の美術の、誰にも知り得らるゝやうにはかられし諸士の眞心のうれしく、をむがしきまゝに、直に諾ひ微力をそへむことを約しぬ。さるはまた我が眼中に常に忘れ得ぬ彼のルーブル博物館の名高き品々もかづかづこの紙上にあらはれきて、十有五年來の渴望をみたしうべきこと多からむと思へばなり。果して然らむには天下の一大寶庫と佛國人の誇り居るかのルーブル博物館と共にこの刊行會は世界の美を集散する我が大御國の一大良港とも誇り得べからざらむや。

今や天下みだれにみだれ、人々美術をかへり見る暇すらなきに、ひとり我が大御國は波風靜かに百花もやう〳〵匂ひ出でむとす。かゝる時にあたりて、この會の起れるはけだし人生の高き趣味を忘れざらしめんとする天の使命とも云ふべし。あゝいかで祝はざらむや、賛けざらむや。

大正五年初春

池邊義象

緒言

夢穏かに眠れる獅子の姿にも似たる現代の印度は、街頭に走り戯るゝ狗兒よりも力なきものの如くなれども、山河の形勢と云ひ、遺物廢墟と云ひ、何れか燦然たる過去の壯觀を語り顏ならぬはないのである。

抑も印度は開國茲に五千年。別けて太古に於ては、西洋の希臘、埃及、東洋の支那と共に、世界文明の淵源として、麗美なる想華、精巧なる技藝、實に過ぎし時代の榮華の俤、懐ひ起すだに、目眩き心酔へるが如く感ずるを禁め得ないのである。されば苟くも文明を說き、藝術を談ずる者、先づ目を過去の印度に注がなければならない。

惟ふに欽明帝の御代に、印度所傳の佛教が漢土を經て我が國に入つて以來、茲に一千三百六十有五歲、時に隆替あり、形式に變遷ありと雖ども、印度思想の、我が國民

性に深き根ざしを有するに至れること今に至るも尙ほ明かである。元來、印度の國民性は、常に高遠幽妙なる理趣に走り、超世間的思想を憧望して、現世の實生活を輕視するの傾向著しきため、史的觀念乏しく、加ふるに何れの國に於ても太古未だ典籍の備はらぬ時代には、口誦によつて史傳若くは思想を傳承するを以て常例とするのであるが、印度に於ては、此の傳承の方法特に顯著なる發達を遂げ、比較的後代までも、此の樣式が踏襲されたる故に、典籍に現はれたる史傳は其の必要大ならず、乃ち其の開明既に年久しきに亙れるに拘らず、史籍の徵すべきもの無き有樣を呈するに至つたのである。國民一般に、歷史に對して多くの注意を拂はなかつたために、上下五千年間に起つた治亂興廢の跡も、僅かに片々たる遺物傳說等に就いて考ふるに過ぎないのである。世界の大偉人の一たる釋迦佛陀さへも、西洋の學者中には、近頃までも其の史的實在に疑を挾み、是れを以て假構に成つた一の理想的人格と考へて居つたものさへ

もあつた位で、大詩聖カリダーサの在世年代の異說を綜合すれば、前後に亘つて約一千年の差を生じ、釋迦出世の年代に關しても、古來五十餘種の多きに上る異說が存在する。之れによるも、如何に印度の歷史が不完全であるかが推察し得られるのである。斯くの如く印度の本國、既に史傳の正確なるものに缺けて居る。然るに我が國に印度思想が渡來したのは、現實の生活を賤視し、時間空間の範疇を超絕した無爲空寂を本旨とする佛敎なるものの形を以て傳へられ、且つ其れも印度本來の言語を以てしたのではなくて、文飾誇張甚しきを特色とせる漢譯本によつたのであるから、我が國に傳つた印度思想に於ては、如何に歷史が無視せられ、從つて事實の眞相が誤つて傳へられて居るかは、推知するに難くはない。實に汗牛充棟の常套語を以てしても、尙ほ形容し盡せない程の澤山な支那及び日本選述の佛典中にも、當面の佛敎の傳來の經路を系統的に著述したものさへも、殆んど唯一の例があるのみで、其れすらも史傳として

の價値は疑はしい位であつて、其の他に至りては、史籍として觀るに足るものの一も存せないのは其の實例である。第十九世紀末期に及んで、歐羅巴の學者が、印度研究に指を染め、彼等の正確なる科學的頭腦に基いた組織的の研究に成つた印度に關する著書に就いて、其の史傳を考察すると、古來の佛典に傳へられた處が、如何に散漫杜撰な史傳であつたかに驚かれる場合も少くはないのである。日本國民が若し直接に印度の言語から其の思想を傳へたのであつたならば、日本の學界は、世界に先立つて印度の事情に精通して居つた筈であるに、漢譯なる一のヴェールを通じて、觀察した結果として、其の眞相を握み損じ、然かも其を以て足れりとして安立して居つたために、千有餘年の後に至つて、僅かに半世紀内外の研究に過ぎない泰西の學者から、却つて印度の過去を敎へ示されるの奇觀を呈するに至つたのである。

史的研究としては、其の傳來年月の久しきに比すれば、自から汗顏に堪へないほ

どに貧弱ではあるが、日本の美術界に印度の要素を渾化融合したことは是亦實に驚く外なき程多大である。印度文明の渡來以前、日本にて、美術と稱すべき美術は殆んど求め得られない。神社建築に於てこそ我が邦固有の樣式が存在して、高雅朴素の愛賞すべき技術が見られたのであるが、彫刻の如き、繪畫の如きに至つては、佛敎美術以前の日本のものは、今日之れを其の遺品に就いて考へるも、唯、考古學的人類學的の價値を認められるに止り、何等美術品として鑒賞に値するものは存在せないのである。然るに佛敎一たび傳來するや、其の敎義の上から、禮拜崇敬の對象として、常に必ず造形美術に據つた佛菩薩天部等の像を必要とし、多くの佛徒の講經修道のためには、廣き僧院の設なかるべからず、加ふるに造像起塔を以て現當二世の利福を祈る方法の一として、盛んに堂塔佛體の建造を奬勵した爲めに、建築彫刻及び之れに伴ふ繪畫刺繍等の美術の進歩實に急速にして、我が美術界は一躍して燦爛目を眩するの壯觀を呈

するに至つたのである。大和法隆寺の三宇の建造物、並に其の金堂の壁畫の如き、奈良京都地方の古社寺に散在せる、天平藤原乃至鎌倉に亘れる麗美若くは雄健なる佛像彫刻の如き、今や印度の本國にも、之れに比すべき優秀なる美術品を見る能はず。是等の美術の要素は、必しも印度思想其の儘の發現にはあらず、支那に在りては六朝以下唐、宋の感化あり、加かも其の多くは、尙ほ其れが三韓を經て我が國に傳來したのではあるが、其の根柢とする處は、印度思想に外ならないのである。彼の史傳が、漢譯の門關を潛つたために、著しく其の眞相を誤り傳へられたのに對比すると、美術は、支那及び三韓の坩堝を經たるに由つて、印度在來の原始狀態を脫却して、雅やかに精練されたものとなるに近づいたのである。推古佛の代表作品と目せられる法隆寺金堂の釋迦三尊が、後世の佛像に比すれば、著しく古拙ではあるが、之れを印度の遺品中に見るものに較べると、尙ほ多少精緻に近い趣のある一例によるも、此の經路は肯かれ得るであらう。

斯くまでも吾が美術界に深い緣故を有する印度美術の研究は、美術史研究者並に美術の一般愛好者に取つては、一日も忽緒に附すべからざる急務である。さて玆に印度美術を研究する第一着手は、果して何れの方面であらうか。先づ廢墟から發掘された遺品の實物を見ることから始めるべきであらうか、或は樣式變遷の經路を研究することから緒に着くべきであらうか、是等は何れも必須の研究法の一である。併し美術研究はもつと深い、もつと大きい點から始める必要がある。是れ獨り印度美術の研究上ばかりでなく、一般の美術研究上に先づ着眼せねばならぬ要點である。美術の本領、美術の職責に接觸する重要なる問題である。本會が美術叢書刊行の劈頭に、美術史の書としては比較的緣の遠い感じのある『印度太古史』を先づ提供するに至つた趣意も、此の點から起つたことである。談は稍々岐路に入る虞はあるが、玆に吾人の所見を略

叙する自由を與へられたい。

凡そ藝術は、嚴峻なる自然の法則に反抗して、靈智の力を自由に發揮せんと試むる人間の努力の產物である。語を以て歌はれ、文字を以て書かれては詩となり、筆により、刀によつて發表されたのが繪畫であり、彫刻であつて、然かも是等は、生物界の縛繩に繫がれ、五尺の弊軀の內に捕へられた心靈の發する苦悶の叫聲である。自由に樂しい天空の生活に憧憬する渴仰の表現である。是れは藝術が、等しく社會事象の一でありながらも、他のものとは異なる職責を有して居る所以である。吾等が古雅雄壯なる美的建築物の下に立つ時、麗美穩雅なる彫刻繪畫に對する時、吾等は一種の崇嚴敬仰の感に打たれ、何等かの天啓にでも接した如く思はれるのである。名匠の優作に接する時、吾等は其の作品が如何に小さいものであつても、其處に偉大な力の籠つたのを感じるのである。たとへ掌上に置かれる程の牙彫人形一つでも、其れが眞に美術の本

領に適つた作品であるならば、吾等は此の一の作品を通じて美術の眞髓に接觸し得るのである。其處に吾等が心靈の眞の悅樂と安慰とを發見し得るのである。玆に至つては美術は一の悟道である。乾山燒の皿一枚、祐乘作の目貫一つは、實に人間の心靈を超世間の妙境に導き、神人冥合理事不二の見地に到達せしめる媒介である。根付彫一つを悟道の管鑰に比するは、言稍々奇に流れる感じがあらうが、是れが美術の本領である。然かも現代の如く、人類の心靈を支配すべき宗敎が、俗衆の歡心を迎合するを以て是れ勤とし、幽妙高遠の敎理を遺却して以て、或ものは祈禱攘災を以て信徒に臨み、之れに依つて往々醫藥の任に代らんとするの變態を示し、或ものは去つて敎理の科學的研究に沒頭して、修證開悟の實蹟を談せず、若くは說を敎育者に等しうして唯、倫常の道を諭すのみである時に於ては、今や心靈の慰安は、宗敎に俟つ能はざるの有樣となつたのである。玆に吾等が進むべきは美術の一路である。賞鑒に於て、又製作

に於て、美術によつてのみ、現代の吾等の心靈は救はれるのである。

されば美術の研究は、其の根本に徹底して美術の眞髓に接觸するに努めなければならない。茲に於て吾等は美術と文學との交渉、更に進んで、思想界の全體と交渉のある美術を欲するのである。色彩の配合、時代の考證、是等は素より美術研究上の要件ではあるが、之れのみを以て美術の本領とすることは出來ない。一層廣い、一層根柢のある美術でなければならない。其れには美術の研究が、作品研究の末にのみ走らないで、其の國文明の過去の歷史、思想發達の經路と常に伴はなければならぬ。即ち本會が『印度太古史』の題下に光づ一般思想の經路を叙述したのは、此の一例を示したのである。

即ち本書は次に提供すべき『印度美術史』の基礎となるべき者であつて、兩卷相依りて以て完璧を成すべきものである。されば本書の著譯に際しても、原書の選擇及び之れが譯述の方針は勿論、補註、附錄の末に至るまでも、專ら此の趣意に適はしめんことに努力し、苟くも根本思潮に關すること大なる事項は、其の史傳たると、宗敎談たるとを論ぜず、事の美術に關すること稍々疎遠なるものと雖ども、努めて之れを輯錄し、以て思想の根柢に留意せしめんことに志したのである。

尙ほ內容に就いて茲に數言を費す必要がある。凡そ洋の東西に依りて學者所見の要旨往々相反せる性質を帶ぶるは避け難い事實である。況して東洋の事柄に就いては、之れを東洋人の觀察した場合と、西洋人の考へた處とは、著しい差違のあるのは常例である。本書の如きも亦其の例に洩れず、史傳觀察必しも悉く東洋の學者の所見と一致して居るではないが、今は原著を尊重して、其の儘に譯出したのである。但し補註附錄に至つては、譯者の見る所に從つて、多少の增減を加へて置いた。

固有名詞は總べて梵語の發音をそのまゝ、片假名を以て直寫することゝしたが、古

來久しく慣用し來つたものは、漢字を當て篏めて置いた。例へば「阿育」(アシヨカ)、「犍陀羅」(カンダーラ)等の如くである。

努めて文飾を省いたため、叙述が著しく乾燥無味のものとなつたが、事實の解し易いのを主眼とした結果、止を得ないことである。

出版者向陵社が、多額の費用を吝まず、多くの玻璃版を挿入して、以て本書を完璧たらしめられた厚意を茲に感謝する。

記して此處に至れば、古文明の壯麗なる狀、髣髴たるものあり。雪峯嶺高く、印度洋波廣し。想華永しへに世に傳はり、藝術の光、千古に盡きず。偉哉。

大正丙辰如月

譯者誌

印度太古史目次

第壹章　印度太古史の淵源……一
梵語の發見……印度歐羅巴語族……古代印度の言語及び文學……アルファベット……銘文及び貨幣の刻印……歴史……ジャイナ教及び佛教の起源

第二章　印度の文明……三一
名稱……境界……重なる侵略者……ドラビディアン……アリアン……本土の自然的區劃……アリアン文明の地理上の經路

第三章　吠陀時代……四四
梨俱吠陀……口授傳承……地理學……文明の狀態……宗教……後の階級制度の萌芽……セーマ吠陀……ヤジュール吠陀……梨俱吠陀との對照……アタルヴァ吠陀……吠陀時代に於ける北印度の主なる區分

第四章　ブラマナ及び優婆尼沙土時代……六四
散文の進歩……ブラマナの内容……言語……地理……サタパタ、ブラマナ……佛教及び古代梵語叙事詩との關係……實行的宗教と學理的宗教……優婆尼沙土……萬有神教……僧職以外の知的活動

第五章　奢那教及び佛教の興起……七八
奢那教及び佛教の創始者……波羅門教に反せる両教の教義……両教の文學……梵語の叙事詩……プラナ……系譜……巴利語の叙事詩……スートラ

第六章　波斯及びマセドニア帝國の印度領地……九七
印度と西洋との關係……ミタンニ王……サイルス……ダリウスの銘文……ヘロドツス……テシアス……毘陀羅と印度……クセルクスの希臘遠征……アレキサンダー大王……アリアン……クルチウス、ルフス……アレキサンダーの印度征服……大王歿後の印度管領……征服の範圍……印度

第七章　モウリア帝國……一二四
摩揭陀王國……チャンドラグプタ……セリウカス、ニカトル……メガステネス……ピンツサラ……アショカ（阿育王）……西洋との交通……佛教の廣宣流布……モウリア帝國の領域……西洋との交通……モウリア帝國の後代史……印度統治者の政策の繼承

第八章　モウリア帝國衰運後の印度……一四三
帝國の分裂……シュンガス……カリンガ王國……アンドラー……バクトリア及びパルチアのヘレニック諸王國……アンチオクス大王の印度征服

第九章　アレキサンダー大王の後繼者……一五三
文書及び貨幣上の記錄……印度のバクトリア征服……ミスラダテスのバクトリア侵略……シヤカ及びユウチイ族のバクトリア占領……印度に於ける希臘諸王……ユウシデムス家及びユウクラテイデス家……メナンダー……梵文學に於ける希臘の寓意……印度に於ける希臘の影響

第十章　パルチア及びシティアの侵略……一七〇
シアカ及びパラヴア族……パルティア起源……印度のシアカ征服顚末……シアカ知事……マルウア王に對するシアカ族の敗北及びヴイクラマ朝の建設……ゴンドフアル子……クシヤナの權力發展……クシヤナ帝國の建設……カニシキア時代

歷年史概要……一八五
地理略解……一九五
本文補註……二二五

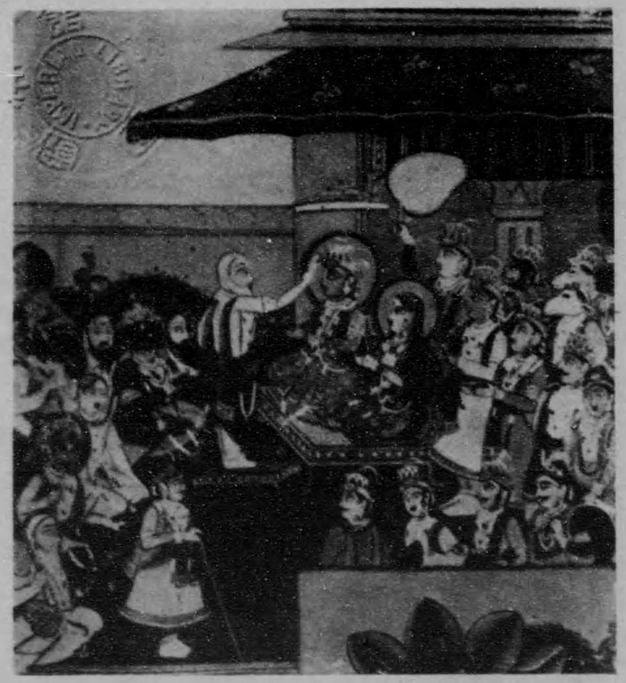
聖牛崇拜の圖

印度古代の貨幣

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13

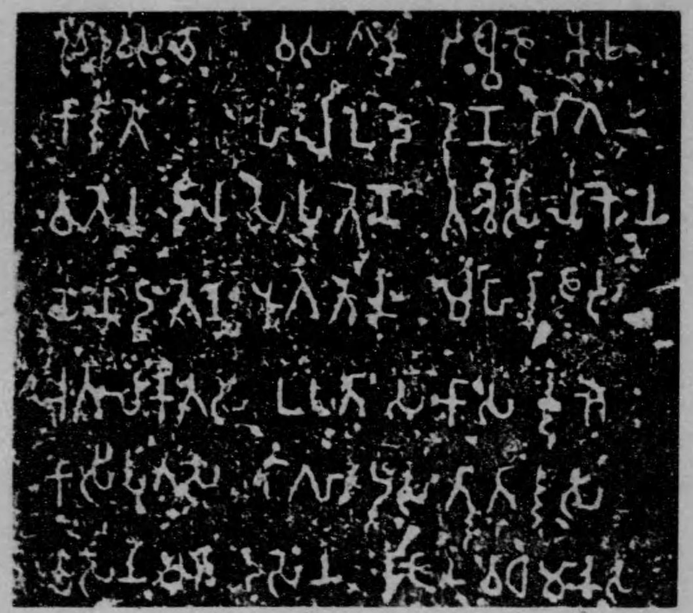
ラマ及びシィタアの
宮廷に在る猿相神

ラマの即位式



ベスナガルの圓柱

ベスナガル圓柱の銘文

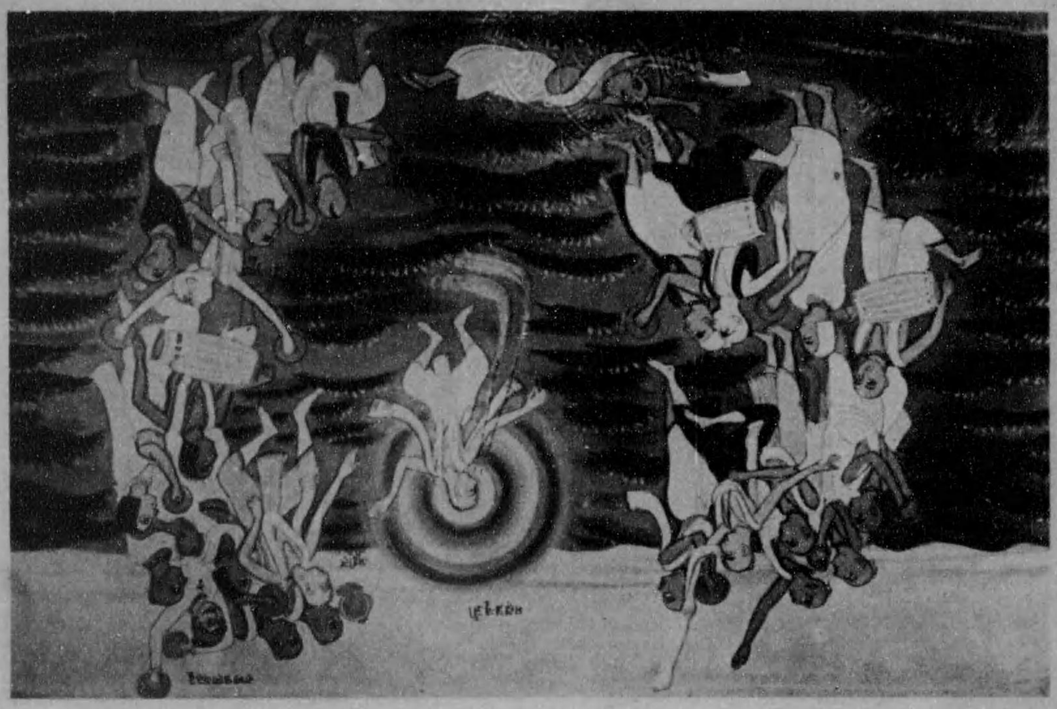


ピィアの像

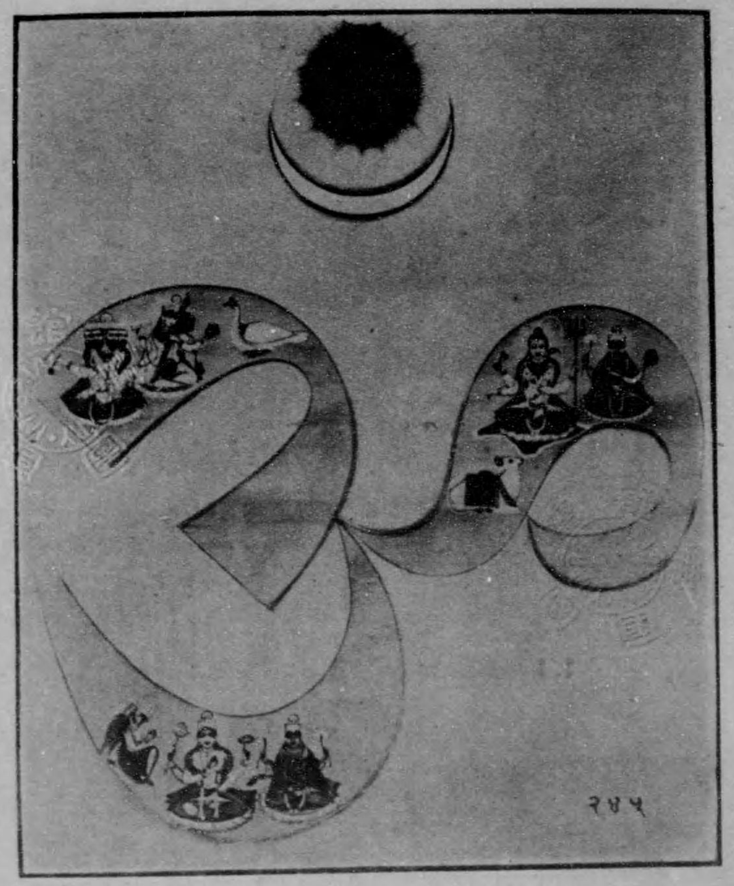
ギルナール岩及びマツラ石獅の銘文

インドラ(帝釋天)及び其の妃

チェタンイアの侍者



梵字オム


२४५

十

神

像

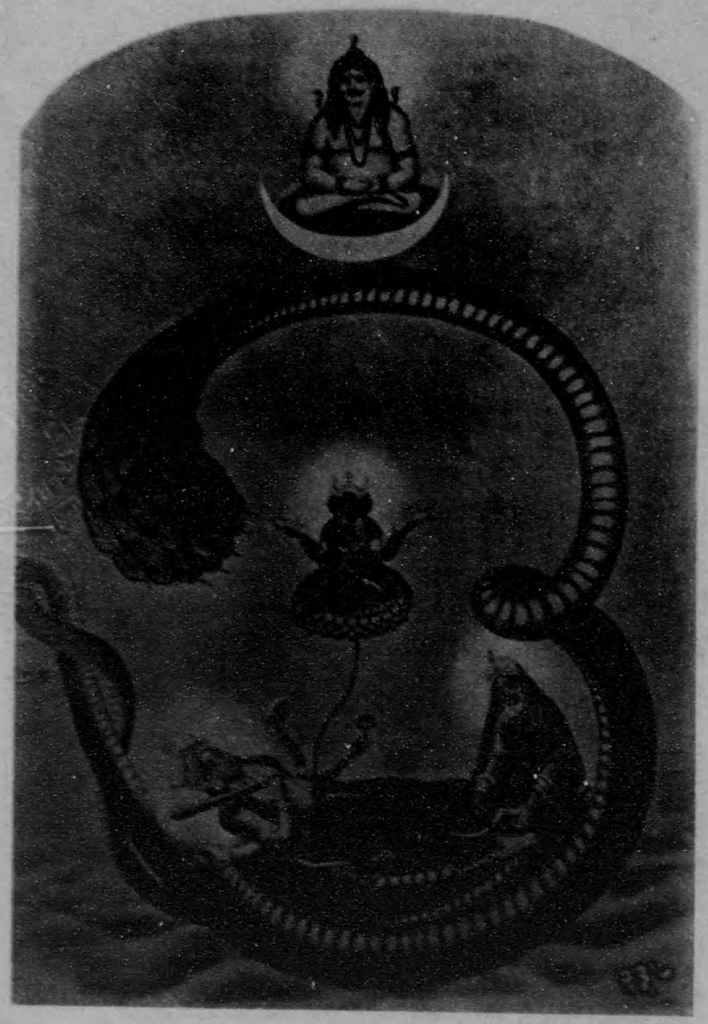
ヴィナヴァの像

ヴィナヴァの像

यव के ऽवर

スゴンの石獅

千頭蛇シエシア



パンチャナナ（シヴァの五頭變化身）

シュヴァ像

ヒンヅ用系の佛徒像

諸神の女相變化身

恒河の神の降來

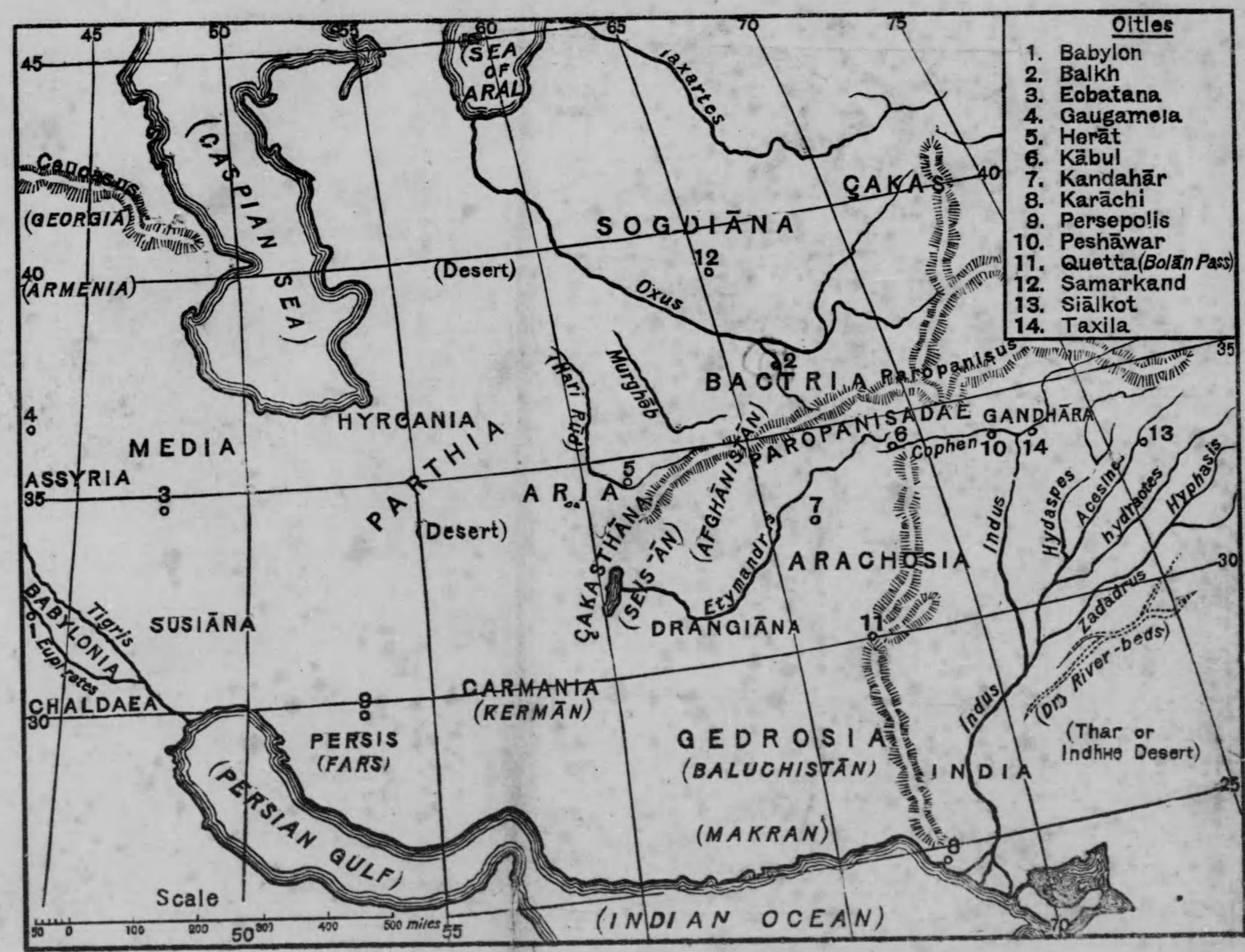
恒河の神像（鰐魚の背に乘りて恒河を渡る）

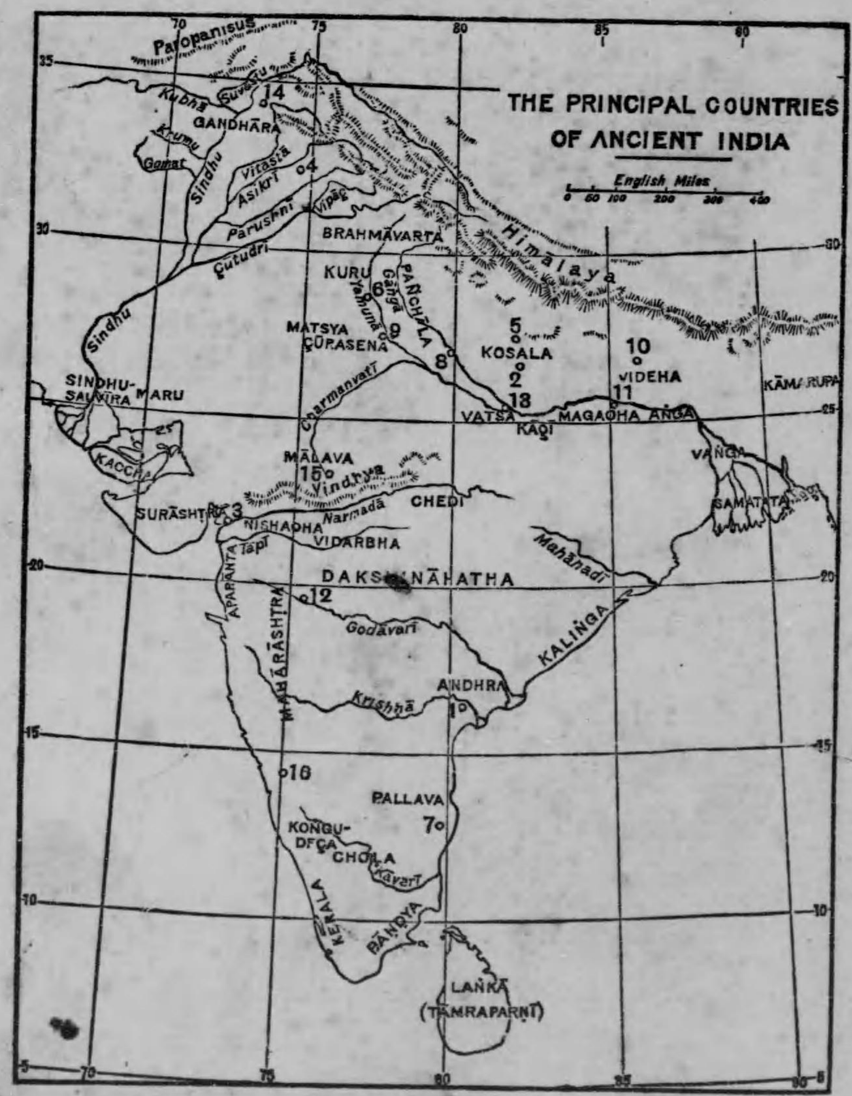
キルナール岩（一八六九年所見）

ラクシミィの誕生

多頭蛇に倚れるヴィシュヌ
其の足を揉むラクシミィ蓮
座上のブラマア

Pass)
35
hasis
30
t)
25


Cities
1. Babylon
2. Balkh
3. Ecbatana
4. Gaugamela
5. Herāt
6. Kābul
7. Kandahār
8. Karāchi
9. Persepolis
10. Peshāwar
11. Quetta (Bolān Pass)
12. Samarkand
13. Siālkot
14. Taxila
(SEA OF ARAL)
Iaxartes
(CASPIAN SEA)
Caucasus
(GEORGIA)
(ARMENIA)
(Desert)
SOGDIĀNA
ÇAKAS
Oxus
Murghāb
(Hari Rud)
BACTRIA
Paropanisus
HYRCANIA
MEDIA
ASSYRIA
PARTHIA
ARIA
(Desert)
PAROPANISADAE
GANDHĀRA
(AFGHĀNISTĀN)
Cophen
ÇAKASTHĀNA
(SEIS-ĀN)
Etymandrus
ARACHOSIA
DRANGIĀNA
Indus
Hydaspes
Acesines
hydraotes
Hyphasis
Zadadrus
(Dry River-beds)
BABYLONIA
Tigris
Euphrates
SUSIĀNA
CHALDAEA
CARMANIA
(KERMĀN)
PERSIS
(FARS)
(PERSIAN GULF)
GEDROSIA
(BALUCHISTĀN)
(MAKRAN)
INDIA
(Thar or Indhne Desert)
(INDIAN OCEAN)
Scale
50 0 100 200 300 400 500 miles


THE PRINCIPAL COUNTRIES
OF ANCIENT INDIA
English Miles
0 50 100 200 300 400
Paropanisus
Kubhā
Gomat
Sindhu
Vitasta
Asikni
Parushni
Vipāś
Çutudri
GANDHĀRA
BRAHMĀVARTA
Himālaya
KURU
Yamuna
Gaṅgā
PAÑCHĀLA
MATSYA
ÇURASENĀ
Charmanvatī
KOSALA
VIDEHA
KĀMARUPA
SINDHU-SAUVĪRA
MARU
VATSA
MAGADHA
AṄGA
KAÇI
KACCHA
MĀLAVA
Vindhya
VAṄGA
SURĀSHTRA
CHEDI
SAMATATA
NISHADHA
Narmadā
VIDARBHA
Tapī
Mahānadī
APARĀNTA
DAKSHIṆĀPATHA
MAHĀRĀSHTRA
Godāvarī
KALIṄGA
ANDHRA
Kṛishṇā
PALLAVA
KONGU-DEÇA
CHOLA
Kāvarī
KERALA
PĀṆḌYA
LAṄKĀ
(TĀMRAPARṆĪ)

印度太古史

第壹章　印度太古史の淵源

梵語の發見……印度歐羅巴語族……古代印度の言語及び文學……アルファベット……銘文及び貨幣の刻印……歴史……ジャイナ教及び佛教の起源

梵語は古代の遺物であるが、其の組織は著しく進んだものであつて、希臘語よりも更に完全で、羅典語よりも語數に富み、又是等よりも細密に精練されたものである。然かも梵語は動詞の語根や文法の形式上に於て、希臘羅典兩語の何れに對しても偶然ならぬ強い親和力を有して居る。而して言語學者が之れを考察するに當つて、是等は

現存せざる或る共通起源から發生したものと信ぜざるを得ない程である。**ゴシツク**と**セルチツク**とが、頗る異なつた熟語を以て混和しながらも、梵語と同一淵源に出たと考ふべき理由が薄弱ではあるが、認められる。而して古代**ペルシヤ**語も亦同一語族に加へて差支ないのである。

ベンガルの亞細亞協會長**サー、ウ井リアム、ジヨーンス**が一七八六年に發表した此の斷案は、言語の歴史的及び科學的研究の嚆矢たるべきものであつて、實に學界の一時期を劃したものと稱すべきである。

氏が斯くの如く語つた當時には、西洋の學者に取つて寧ろ新しい天啓とも稱すべき新發見が理論的解決を要する一の問題を生じたのである。而して茲に新發見と呼ぶのは、古代の希臘及び羅馬の古典的言語と最密接の關係あることを示すべき言語を以て書かれた上代の古典的文學が、夙に印度に存在して居つたのを知り得たことである。

梵語と希臘、羅典及び他の歐羅巴諸國の言語との親緣は、之れを如何に解明すべきであらうか。第十八世紀の末期から第十九世紀の初期に亘つては、諸學者の說には、梵語を以て他の諸國の言語の發生した母語だとする傾向があつた。前記の**サー、ウ井リアム、ジヨーンス**の唱道した意見の行はれ初めたのは、爾後一時代を經た後である。元來印度歐羅巴語族なるものがあつて、之れに屬する各國語が、共同祖先たる言語から漸々降下し來つて、其の各が亦互に關係を有するものであるとの意見は、後に比較言語學の創始者である、**フランツ、ボツプ**が其の正しいことを、確かに證明したのである。**ボツプ**の最近の著作は一八一六年に公にされたのであつて、該研究に携はつた多數の後繼者によつても之れが證明されて居る。

斯樣に梵語の研究から最初の刺擊を受けた比較言語學は、何れの方面から考へても第十九世紀に於ける知的勝利の少くとも一部分を代表して居る。個々の國語と方言と

の史的整置及び其の各々の中に行はれる發音變化の比較は、あらゆる他の自然現象と等しく、人類の言語も亦自然の法則に從ふものであることを示して居る。一の親系から國語の差異を生ずる變化の過程が、勝手氣儘のものではなくて、或る確實な法則に從つて行はれるものであることは、前記研究法から得た證據を以て證明される。斯かる法則の作用は規則正しいものではあるが、唯、人間が理性的及び模倣的生物であるから、之れに變動を呈するのである。國語の變化を支配する法則の性質は實際に半は機械的であつて、半は心理的である。

古代文明研究の立脚地から觀て、一層價値の大なるべきものは、有史以前の印度歐羅巴國民の歴史研究上に、曙光を與へた比較言語學の功績である。上代に於ては、かかる國民は、東は支那**トルキスタン**より、西は**アイルランド**に至るまで、亞細亞と歐羅巴との全表面に廣く分布されて居つたのである。乍去彼等が聯合された際に多少隔つた一時期があつた筈である。さて語が物質的客觀界と觀念界との記錄を保存するやうになつて以來は、異なつた國語の單語を愼重に檢査し、比較して、之れに因つて印度歐羅巴國民の文明情態、社會上及び政治上の組織並に宗教思想に關する知識を得ることが可能となつた。而して是れは尙ほ未だ渾一であつた時期にも、種々の支派に分裂した後の折にも同樣であつた。

上代に於ける科學の狀態は、之れが探究、往々甚しく感情的であつて、冷靜な識別を缺いて居つたのは明かである。而して文明の記錄としての國語の證憑によると、道理に基くといふよりも、緊張した情感に傾いて證明せられることが屢々あつた。されど廣汎なる事實が、爭論すべき範圍外に存立して居つたことは勿論である。例へば國語の上の證據が結局、印度歐羅巴族の中の波斯及び印度支屬の間には、特に親密な連關が成立する筈であることを證明して居る。波斯及び印度の最古代の聖典たる**アヴエ**

スタと梨倶吠陀との間に於ける言語及び思想の同似である所以は、該族中の他のものと離れた後に、是等の二國民が、相當なる期間共同生活を營み、而して兩國民が分立したのは、兩聖典中の早きもの即梨倶吠陀の製作時からあまり遠く隔たらない前であつたことを推斷して、以て說明し得られるのである。印度歐羅巴族中の此の特殊なる一群即ちアリアンなる語を以て通例示されるものに就いて次に說明を加へる。此の名稱は波斯印度兩國民が各々適用したものであつて、アヴェスタではアイリア、梵語ではアリアと呼ぶのである。

以上は歐羅巴人が、古代印度の古典的國語の研究から得た第一の結果である。之れによつて人類の言語の性質に對する認識の上に、完全なる革新が行はれ、又有史時代に印度及び歐羅巴の二文明に於て優秀なる部分を占めて居つた、國民に關する歷史の缺失した部分が恢復されたのである。梵語が發見され、之れが希臘語及び羅典語との間には明かに類似點のあることが認められたので、嘗ては夢想だもせられなかつた兩者間の聯關が可能であることを暗示され、且つ歷史的及び比較的研究法が、言語の上にも應用される道が開かれたのである。斯かる研究方法は、後にチヤーレス、ダーウイン其他の大なる自然科學者等が、物質的宇宙及び生物有機體に應用して思想界に顯著なる勝利を贏ち得たるものと同樣である。

言語に關し、又現代の吾等が從事する如き言語の科學的研究に就いての印度歐羅巴族の思想として通俗なるものは、第十八世紀末及び第十九世紀初期に當つて、著しく進步した頭腦を有する思想家以外のあらゆる人々に一大蹉跌を與へたのである。卽ち彼等民衆は、過去數世紀の久しきに亙つて、ヘブリユー語が人類の言語の原始のものであつて、地球上の用語の不同は、彼バベル高塔の建設者等に加へられた神罰の結果であると信じて居つた。然るに今や此の堅き信仰が甚しく攪亂されて終つたのである。

梵語の發見の影響が、西洋の知的生活上に及んだ如く、大に且つ遙かに擴布したのは印度の古代文學や銘文などを解說するに當り、西洋の研究法を應用した結果に負ふ處は少くないのである。

一七八四年に東洋研究奬勵のため、**サー、ウ井リアム、ジョーンス**が**ベンガル**の亞細亞協會を創立した際には、紀元後第十一世紀の**マホメッド**征服以前の印度の歷史は全く空虛であつた。即ち此期間には何等の事件もなく、一の人格ある者も出でず、一の記念物もなく、文學上の產物をも見なかつた。廣汎多樣なる古代の梵語文學は、散文たると韻文たるとを問はず、皆銘文の形式で遺存して居る。而して歐羅巴の諸學者は、印度の學者の協助によつて、既に斯かる銘文の正本並に其の飜譯を公にし始めた。併し其等銘文の製作年代に就いては、更に判然したものはない。梵語は過去數世紀間國民の一般言語としては、用ひられなかつた。歐羅巴史の中世紀に於ける羅典語と同じく、學者社會の特別の所有物となつて、彼等の起源を神聖なるものと說き、世俗の文學にては、神祕的なる口碑傳說の雲に包まれた模糊遼遠の時代に作られたものと考へて居つたのは久しい以前からであつた。印度の學說に依れば宇宙は無際限に其の成壞の連續を繰返すものであつて、一回の成壞は梵天の一晝夜に相當し、其れは各一千劫にして四百三十二萬年に該當するのである。斯かる長期間に對望すれば、吾人の知れる世界史に於ける年月は、是等の大劫を組成する四劫の最も短く又最も衰頽せる**カリ**期と稱するものたるに過ぎない。然かも大洋に於ける一滴水にも比すべきものにして、之れを看過するも差支なき程のものである。

茫漠として尋ぬる能はざりし印度古代の歷史の概要が判明し、紀元前約一二〇〇年以前からの、印度の宗敎的及び知的文明の經路を反映する印度文學が、年次的に分類されたことは、殆んど全く之れを、第十九世紀中の學者の努力の結果に歸すべきであ

る。

斯かる歴史編纂の材料は次の三源流から重に得たのである。即ち(一)波羅門教、ジャイナ教及び佛教、(二)石板又は銅板、貨幣及び印章の銘文、(三)諸外國就中希臘羅典及び支那の著作家の說即ち是れである。

考古學の進歩によつて多大の望を嘱されて居るが、現今、歴史に存する大なる失傳中の幾分は、到底連關した說明を加へ得ないものと云つて差支ないのである。印度の極めて古き時代の住民に就いては、有史以前に關する考古學及び人種學の研究から蒐集し得た事實の外には、何ものをも知り得ないのである。

語の通りの意義に解した歴史なるもの、換言せば、事件の經過と思想の進歩とに於ける連關を說いたのみのものは、文學即ち或る記述を書冊に戴せたものの存在とは、全く無關係である。然るに印度に於ては、斯かるものは、アリアン民族が其の西北國境の地方を侵略して、其の主なる特性が希臘、伊太利及び日耳曼の古代文明に近似して居る印度歐羅巴文明を、輸入した時期より以前には見られなかつたのである。印度の古代に就いて知り得る處は、此の文明の普及する經路を追ふものであつて、該文明は先づパンジャブから印度の中央大平原地方、ガンゼス及びジャムナ兩河地方に至り、次でデツカン地方に及んだのである。斯かる擴張の事實は、梵語及び其の方言の傳播によつて到處に認められる。而して此の波及力は、現代に至るまでも彼の往時のドラヴィディアン文明と其の言語とが、尙ほ優勢である南方印度に於ては一頓挫に出會つた。該地方に於ては歴史は、基督紀元に先つて其の最初の頁を開いたとは言ひ得ないのである。

印度最古の記錄に用ひられた言語は、文學にても又銘文類にても、すべて其の文字上印度歐羅巴語であつた。即ち希臘語及び羅典語に關係を有し、延いて現代の英吉利

語と連關を持つのであつて、印度に於て既に廢滅に歸した古代の形式に關するものではない。**アリアン**種族は、恐く數代若くは數世紀間に亘つて、南部**アフガニスタン**及び**パンジャブ**方面に向つて山徑を超へ、或は**バルチスタン**の平原を經て信度河地方及び**インダス**の谿谷に移住し續けたもので、是等が同系から出でゝ種々に變化した方言を使用したのは明かである。原始民族の場合が常に斯くあることは、何國に於ても言語の歷史の示す處である。之れが年月を經過する間に、交通の基礎定り、文化が進步するに至ると、宗敎、政治、商業の中心として、特に重要となつた特殊の地方の方言が、漸く他の方言を凌ぐの勢を呈し、遂には敎育ある階級及び文學上の標準語として汎く認められるに至るのである。斯かる地位に置かれた方言は、其の使用上に於て、他の諸方言を制御する傾向を生ずる。如上の通則は、吾人が言語史によつて解說し得るのである。**スキート**の說に依れば、英國の**マーシアン**方言の變態である東部中國の語は、遂に他の諸地方に普及し、結局一方言に過ぎざる位置から起つて、全國土の言語として、標準語たるに至つたのであると。

印度に於ては、標準語又は文學上の言語は、先づ梨俱吠陀の歌謠に現はれて居るが、其の最も古きは、晩くも基督紀元前一二〇〇年以上に始つたものでなければならない。梨俱吠陀に用ひられた梵語は、現今の南方**アフガニスタン**、西北國境地方、及び**パンジャブ**に該當する地方に住んだ詩僧の用語であつて、之れを後世の古典的梵語に比すると、例へば**チヨーサー**の用語を**セキスピアー**のものに比べたよりも一層大なる差違が存するのである。

吠陀期を過ぎた後に至つて、**アリアン**文明は、**ジャムナ**、**ガンゼス**の豐饒なる平原に及び、東南方へ傳播した。而して**ジャムナ**等の地方は、波羅門敎徒の政治及び宗敎上の中心地たるのみならず、又其の敎敵たる**ジャイナ**敎及び佛敎の發源地である。而

してブラマナとして著名なる經典並にマハバラータ及びラーマヤーナの二大史詩も此の地方で編成されたのである。

波羅門（ブラフマンス）なる僧職階級を殆んど特別に代表する波羅門經典と、刹帝利（クシヤツトリヤ）なる司戰階級に主として屬する叙事詩との如き種類の文學の用語は、或る意味にては、吠陀と古典的梵語との過渡を示すものである。其の性質から觀ると、如上の二種の典型は、廣く有識者と通俗とを區別するものである。ブラマナの梵語は、年月の經過に伴つて、不知不識の間に、古典的梵語中に沒入するが、一方に叙事詩の言語は、既に書冊に上され、其の古文體と不規則性とを常に保有して居る。

眞に古典的梵語と認むべきものゝ著作の、初めて世に出たのは、紀元前約五〇〇年頃で即ち吠陀中の難解の意義に注釋を加へたヤシヨカ氏のニルクタであるが、其の中には梵語の精練された典型が三種現はれて居る。其の第一種は既に太古から神聖なる性質を以て研究されたものであつて、西北部地方に於ける古代アリアン移住民の詩文の用語である。第二種は戰時の儀典英雄の事蹟、古代聖賢の士に就いて歌唱する詩人の用語にして、第三種に敎へられたるものは波羅門の用語の形式である。梵語なるものは、字義を直譯せば、修養てふ意味を有するサウスクリタから轉化したサンスクリツト即ち梵語にして、嚴密に言へば前掲の第三種の言語に限るのである。而して其の形式たるや、字義の取扱ひと文法上の精練とが久しき經路を通り來つた結果として、正しい言語の標準として一般に認められたものである。

斯くの如く確かに定まつた文字上に用ゐられた言語は、其の代表する文明が繼續する限りは、材質の變化を受けることがない。言語を話す形式は、之れを書き記す形式に比すれば、原則として自から注意と苦心との度は低いものである。而して兩形式共、何れも之れを使用する說話者若くは記述者の個人每の敎育程度の高下に應じて變

化するのである。乃で典型には種々不定なる變異を呈するが、言語の性質には、更に實質的差異を生ずるものではない。古典的梵語は殆んど二十五世紀間の久しきに亘つて必然的に變化を生ぜずして存續し、最初は敎育ある階級及び文學上の言語として用ひられ、後には印度の學識ある人々の間の言語として使用せられ、以て現代にまで及んで居る。

國語中には一國の文學語に正反對せる地方の方言なるものがある。文學語の確定し居るに對して、方言は言語自らが生命を有して生長發達し、人類言語の法則に從つて變化しつゝ行くものである、文學語も元來は或る特殊なる地方の言語たることは明かであるが、其れが敎育ある人々の間に使用されて、全國に普及するに至つたものであるが、方言なるものは、古代に於ても近世の印度に於けると同じく、人口の大多數を占むる普通の住民の話す言語である。此の故に北方印度の近世に於けるものの大多數が、

古代の方語所謂**プラクリット**とて、自然的若くは未敎化的との意義を有する語から生じたことは、重に全く自然的進步の經路に由るのである。其の方法たるや**ロマンス**語の起源が、文學的の羅典語にあらずして、普通の國民によつて話される羅典の方言に存するものと全く同樣である。

されど文學語と方言とが並存しながらも、所屬の文明が、該性質を曲變せない限りは、文學語は、必ず方言の影響を受けて發達する傾向を有するものである。古代印度の銘文と貨幣の刻印とは、かゝる事實を明かに說明して居る。其の文字に由て考ふれば、學者にも無敎育者にも同樣に總ての人々に告げんと欲するものゝ如くに、紀元前第三世紀に初めて現はれた際に、**プラクリット**語で記されたのであるが、時の進むに伴つて、該言語は、漸次に文學語から影響を受け、遂には其れと同化したのである。然るに紀元後約四百年を經て後には、**プラクリット**が、かゝる目的を以て用ひられ始

め、梵語は其の位置を讓つた。

梵語の歴史は、特に波羅門教と聯關して居る。而して其の傳來は、時空の範疇を脱した時代を通じて保持されたのである。梵語の波羅門に於ける關係は、恰かも羅典語の羅馬加特立教に於けると同樣である。奢那教(ジャイナ)及び佛教は、波羅門教の傳説に反對して起つたものであるが、歐羅巴に於ける革新したる宗教と同じやうに、兩教共に、其等の教義が宣布された諸地方に行はれるやうになつた梵語か或は**プラクリット**の何れかの話體を用ひ初めた。佛教徒の聖典は、尼波羅(ネパール)國では梵語に譯され、其の他の國國では**プラクリット**語に譯されて居る。宗教上の目的に使用されるために、或る**プラクリット**は進歩して文學語となつた。而して年月の經過するに從つて、梵語の場合に於けると正しく同樣に、幾多の文法學者は、嚴密なる法則を之れに關して設けたのである。就中最も注意すべきものは巴利語である。此の語は多分紀元前三世紀に、錫蘭(セイロン)

に移植された或る印度**プラクリット**の文學的形式のものであつて、同島に永久の基礎を置いて、續いて**ビルマ**及び**シヤム**に傳播した佛教の特殊の狀況に於ける神聖なる言語となつたのである。紀元後約第五世紀以後に、印度にては、奢那教徒及び佛教徒の一部分で、梵語を使用する傾向が增大して、遂に全大陸に亘つて宗教及び學問上の用語となるに至つた。

印度及び錫蘭のあらゆる古代文學が、據つて以て保存された諸言語は如上のものであるが、此の文學たるや分布非常に廣汎にして、其の性質は最も變化に富んで居つた。而して散文でも、韻文でも、組織の諸の種類中表現せないものはなかつた。人智の活動狀態にて記錄を遺さぬものはなかつたが、唯、自然科學のみは、歐羅巴に於てでさへも、最近二百五十年間に創始されたものであるから此處には除外されるべきである。今、波羅門、奢那教徒、佛教徒の古代印度文學を、希臘及び羅典の古典と比較すると

顯著なる一缺點が發見される。即ち前者は其の何れに於ても、最古の時代以外には、歴史的組織の方法に更に進歩を認められない。文學の源泉即ち英雄を詠せる詩歌、お伽噺史傳、古代系譜等は、實に豐富である。文學により、又銘文によれば、功勞あるものや、又**マホメット**征服以前二十二世紀間に亙つて、印度大陸に於て、權力を得て繁昌し、而して衰頽に歸したる國民を數多く知られるが、斯かる國民の中に一の歴史家が出なかつた。古代の印度には一人の**ヘロドツス**なく、又**スシディデス**はなかつた。**リヴィ**も**タシツス**も出なかつた。印度文學は、國民の日常生活、社會組織、宗教、藝術及び科學の進歩等を探究し得る點に於て、材料を供給する。而して其の完全なることは、古代に於ける比ではない。併し統一せる事件の記載なく、歴年史は殆んど全く缺けて居る。例せば、各々異なつた在位の期間を以て記する治世は、確かに示されて居るが、印度歴年史の斷案に對しては、何等の定つた標識を附與せないのである。是等は個々別樣であるが、其の然る所以は、多少は元來の誤謬であり得やうが、主としては、久しく口授の形式で傳承した結果として生じた聖典に於ける避け得ない弊習に基いたのであらう。尚又、他の原因によつて同時代たることの證明し得られる諸王朝を、往々繼起的に並べたために、誤謬を生じたのである。單に古記錄の斷片のみから得た資料に基いて組成した印度の編史方法に在りては、數百年、場合によつては數千年の誤算さへも生ずるのは當然だと思はれるのである。

文學上の此の缺點は、幸にも、初期の印度歴史の他の源因に由つて、或る程度までは補塡されたのである。印度の若干の國々及び其の國々の或る時代に關しては、製作年代の記された銘文や、貨幣の刻印を參考として、一種の歴年史を纂輯し得たのであつた。而して最近三世紀間に亘る近代の諸學者は、此の最も價値ある歴史的證左を、全く有効に運用したのである。

印度の記念銘文が、初めて考古學者の注意を惹いた頃には、古代の銘文若くは貨幣刻印の、一綴さへも、未だ何人も讀み得なかつた。久しき以前には、古代の**アルファベット**に對するあらゆる知識は、閑却されて居つた。今では容易く、且つ精確に讀み得られるやうになつた斯かる**アルファベット**は二種あつて、兩者共に非印度（**セミチック**）系に屬する。現代の學者は、是等を**ブラミイ**及び**カロスジユイ**と呼んで居る。此の名稱は、**ラリタ**、**ヴィスタラ**と名づくる梵語の典籍中に見える佛陀の青年時代の教育の話の中に在るものと思はれる。

ブラミイは必しも變化せないではないが、通例は左から右へ向つて書き進むものであつて、現在見るが如く、多種多樣の相異あるあらゆる近代の印度に行はれる**アルファベット**の母であると見て差支ない。而して**ブラミイ**文學は、**モアビット**石（紀元前八百九十年頃）に記されてある**フィニシア**文字の典型に、其の淵源を有して、それが貿易商人の手によつて、**メソポタミア**を經て、印度に傳へられたのであるらしい。然るに總ての歐羅巴の**アルファベット**は、希臘語を通じて、其の源泉を**フィニシア**文學に有するのであるから、**ブラミイ**並に總ての近世印度の**アルファベット**と、現在の歐羅巴語の**アルファベット**とは同一起源に出でたものである。

カロシュチイは、特に西北印度（**アフガニスタン**及び**パンジヤブ**）に用ひられた**アルファベット**であつて、紀元前第五世紀に、西方亞細亞一般に行はれた**アラメイク**字體の變形である。此の**アラメイク**體は、**シリア**、**メソポタミヤ**のものであるから、元來は、**ブラミイ**と同じ源に出でたことは明かである。而して**カロシュチィ**は、恐らく其の最古體では、**ブラミイ**をも含有して居つた大抵の他の**セミチック**の**アルファベット**の如く、右から左へ書いたのであらう。之れは紀元後第三世紀には、既に印度に見られなかつたが、紀元後第一世紀に、迦膩色迦（カニシキヤ）王の印度帝國の一部を成した支那**トル**

キスタンの西部地方に於て、若干の期間、用ひられて居つた。此の二種の**アルファベット**の解釋は、紀元前二〇〇年頃から同二五年頃まで、**アフガニスタン**と**パンジヤブ**地方とを管掌して居つた希臘王族が刻印したる、兩種の言語を記した貨幣から得られたのである。是等の貨幣は、規則正しく、其の表面には希臘文にて、王の姓名及び稱號を記し、其の裏面には、印度の飜譯を載せてある。之れを解譯するに際し、最先には、印度風である王の名稱が、希臘語と一致し、進んで**アルファベット**の反譯が得られ、此の反譯に由つて速かに、希臘のものを以て、貨幣に在る印度の稱號をも說明するやうになつた。かくて不撓不屈の努力に、幾多の年月を經過したが、遂には斯くの如く貨幣の刻印から習得した知識を應用して、長き銘文を完全に解釋し、飜譯するに至つた。而して是等の銘文たるや、石又は銅板に彫刻したものであつて、印度の諸地方から發見されたものである。

印章の如き銘文の文字は、時としては公文であり、又時としては私用に關するものであるが、貨幣の刻印の如きは、其の性質上から觀て、必ず公のものである。銘文刻印共に、其の年代は、或は當時の王の治世年號を用ひ、或は印度の或る時期の年序を以て示したのである。若し確實に其の年代が記してなくとも、考古學上の證據に因つて、大抵は或る一定の年代と其の範圍とを、認定し得るのである。此の故に印度の諸地方に在る諸王家の歷史に關する確實なる資料は、是等に因つて得られるのである。吾人は之れが助に藉りて往々、政朝の記錄を再興し、又既に其の名稱が、歷史上から散逸した王朝に就いて知り得る場合がある。

されど印度上古史を包圍する闇黑裡に、之れを破るべき一道の曙光を與へたものは、印度の文學でもなく、又如上の銘文でもなく、其は實に希臘であつた。

耶蘇紀元前數世紀前に於て、西洋人が印度に關係を有したのは、極めて僅かの期間

と、一隅の地方とに局つた傳說的の事柄のみであつた。然るに紀元前三二七年より同五年に至る**アレキサンダー**大王の印度征戰、並に同三〇五年に於ける其の繼嗣**セリウカス**、**ニカトル**の戰役に就いて、希臘の諸歷史家が、其の交通を完成した。該史家は、興起の原因を、**サントロコットス**と呼ぶ印度の冒險者の勢力に歸するが、此の**サンドロコットス**なる者は、**サー**、**ウ井リアム**、**ジョーンス**が、初めて、**チヤンドラグプタ**と同一であることを認めたので、此の**チヤンドラグプタ**なる者は**モーリア**帝國の建設者として知られて居つて、該帝國たるや其の孫**アショカ**王の治世には其の盛觀を極めて極南を除いた印度全大陸のみならず、現今**アフガニスタン**及び**ベルチスタン**として知られる諸國の大部分を含んで居つた。西北印度の希臘領地は、**アレキサンダー**の歿後數年間、**チヤンドラグプタ**の統治の下に置かれ、而して紀元前三〇五年に、**セリユウカス**との間に締した平和條約によつて、其の所有權が確保されたのである。乃ち紀

元前三〇五年から三二五年までに、**パンジヤブ**に於ける權力に對する**チヤンドラグプタ**の權勢增加が行はれたことは確かである。

サンドロコットスと**チヤンドラグプタ**との間の一致が、印度歷年史の會合點としてよく知られた。而して此の一致たるや、希臘及び印度の記錄が互に關係して成立たせたものである。而して是れが、歷年史上の隔離を、畧々正確に測り得べき一定點となり得たのである。

其の後、印度史の三主要源泉たる印度の文學、印度の銘文類並に外國の著作の一から、若干の定點を得るに至つた。斯くの如くにして**モーリア**朝の第三の王たる**アショカ**（阿育）の治世の期間は、希臘史によつて其の年代が知られる當時の**ヘレニック**の五朝の銘文中の一に記載された處に基いて定められる。五朝とは(一)**シリア**の**アンテイオクス**二世（紀元前二六一—二四六年）、(二)埃及の**トレミー**、**フィラデルフス**（紀元

前二八五—二四七年）(三)**チレ子**のマガス（紀元前二八五—二五八年）、(四)**マセドン**のアンチオゴヌス、**ゴナタス**（紀元前二七七—二三九年）、及び(五)**エピルス**のアレキサンダー（紀元前二七二年）即ち是れである。

各時代の開始の年數は、銘文の年代が一般に表示されて居るために決定されたから、供給された歴史的事實を、組織的に整頓するに一層の便宜が與へられたのである。

ヴィクラマ時代が紀元前五八年に始り、**シアカ**時代が紀元後七八年に始つて、其の年暦は、尙ほ印度の他の地方に續いて用ひられて居るが、研究の結果、決定された他の諸時代の開始期を例示すると、**トライクタカケエディ**即ち**カラクリ**時代は、紀元後二四九年に、**グプタ**時代は、紀元後三一九年に、**ハルシヤヴァルダーナ**王朝は、紀元後六〇六年に始つたのである。是等は何れも、印度の或る地方に、一の大强國が設定されたことを示すものであつて、各其の建設者が君臨した年代である。

茲に印度の宗教史上に最も重要なる一時期を劃したのは、奢那教及び佛教の興起である。而して其の年代は、典籍と銘文との双方から考察して略々確認されて居る。如上の二宗教は、頗る通俗的であつて、紀元前第六世紀に於て、波羅門教の形式主義と、僧職階級の至上權とに反抗して起つた諸運動中にて、最も成功したものである。兩教の主唱者は、刹帝利（クシヤツトリヤ）若くは貴紳武門の出身であつて、奢那教の祖**ヴァルダマーナ**、**ジユナタブトラ**の在世は、恐くは紀元前五九九年乃至五二七年なるべく、佛教の開祖悉達多瞿曇（シツダルタゴータマ）即ち佛陀釋迦は、凡そ紀元前五六三年から四八三年に至つて存在した人である。

是等二種の革新的宗教は、直接波羅門教から發生し、且つ其の根本思想を多く繼承せしとは雖ども、尙ほ新なる要素を印度の知的生活中に導き入れ、後代の文明の重要なる成因となつたのである。此の兩教の興起以前の時代に關しては、精確なる年代は掲

げられて居ない。斯かる上古に屬する時代の事柄は、言語、宗教、社交制度に於ける特色の變異を表現する一大文學によつて示されて居つて、是等の數世紀間なるものは、如上のもの共が完成されるために要したものと思はれるのである。斯かる變化の經路を辿れば、文學に於ける劃線をも明瞭に識別し得べく、而して上古に於ける比較的に整備した一種の歴年史をも成立させ得るのである。されど、相對的の歴年史の方法に關聯して、便宜上吾人の定めたかゝる年代は、畢竟想像的のものたるに過ぎないことは言ふまでもない。斯かる印度上古の歴史が、終結を告げるべき最後の限界は、一面には比較言語學上の證據と、印度歐羅巴文明の普及とに由つて暗示され、他面には奢那教と佛教との興起によつて限定されたのである。

第二章　印度の文明

名稱……境界……重なる侵略者……ドラビディアン
……アリアン……本土の自然的區劃……アリアン
文明の地理上の經路

印度なる語は、元來「**インダス**河の國」の意義を有するが、實際の字義から云へば信度と同義である。**アヴエスター**又は**ダリウス**王(紀元前五二二年—四八六年)の銘文には、此の嚴密な意味を以て、上古史上では往々波斯領であつた**インダス**河の西方の土地を稱するに用ひられて居る。彼の**アレキサンダー**大王が、波斯の征服者として要求したのは此の地方であつた。さて印度の名は、主として**ヘロドタス**や**アレキサンダー**戰役の歴史家などによつて西洋に知られたのであるが、斯くの如く最も熟知された一部分の名稱が、遂には全國土の名稱に轉用されることは、殆んど地理的用語上の一法

則だとも言ひ得るのである。

梵文學に於ても、印度の全大陸を示すべき名稱の無かつた比較的後期にては唯此の語のみであつた。此の事たるや、すべての初期の文學が**アリアン**文明に屬し、其れが漸次に西北部から、中央部及び時々南部へ進展する經路を史上から考察し得る如く明白である。該文明の地理的見地は、自から或特殊の時期に到達した場所に限られる筈であるが、**ベーラタ**又は**ベーラタバーシヤ**なる內容に富んだ名稱は、先づ其の記文を充たすものであつて、之れは「**ベーラタ**の實現」を意味し、昔嘶中に、全世界を統治したものとして想像される或る帝王に關係して居る。此の名の史的起源は、梨俱吠陀中に熟知された**ベータラア**の古代**アリアン**種族中に認められる。

印度大陸即ち**ベーラタヴバーシヤ**の境域は、露國を除いた歐羅巴全土と同面積であつて、其の大部分は自然狀況良好である。印度北部地方は交通し難い連峯を以て、

亞細亞洲の他の部分と殆んど全く隔離されて居る。而して其南部地方を形成する三角形半島の東西兩側は共に海に瀕して居るが、北方の界限は必しも確定し得ない。而して其の東西の極限は、一方には支那帝國へ、他方には波斯國への交通路に供せられる谿谷並に山徑が通じて居つたが、現時は印度帝國に至る是等の通路は、政治的保留の關係から、故らに閉塞されて居るのである。併し一七三八年に波斯王**ナーディル**、**シヤー**が印度を侵し、ムガール王の首都**デルヒィ**を包圍した時までは、無數の亞細亞の蠻族が、印度に到る山徑谿谷を來往したのである。故に印度帝國では史上初期には同一傾向の下に在つた種族と言語とに、顯著なる差違を呈して居る。人類學的語學的の印度地圖を一見せば、其の人種及び言語の特質が、東方は蒙古にして、西方は波斯又は**サイシア**なることを認め得られる。然るに北方にて優勢である**アリアン**文化は、史上に認められる侵畧の結果であつて、南方に於て尙ほ持續する**ドラウィディア**の文化は、

蓋し又有史以前の侵略に基くものであらう。

人類社會の歴史の最重要なる成素の一である住民移動の主なる動機は、食物の缺乏である。中央亞細亞に於ける陸地の漸次乾燥することが、此の缺乏の主因であつた。此の乾燥たるや、全地球に影響する物理的の原因或は他の衝擊によつて、地殼若くは他地方から來る降雨を伴ふ風を防止する高峻なる山脈の收縮、或は森林の濫伐及び灌漑の懈怠など即ち人間の不要意のために生ずるものではあるが、併し又史上に現はれ得べき進歩の現象である。**バルチスタン**及び**セイスタン**の探險は、土地の乾燥のために消滅した過去文明の記念を明かにしたが、先づ**サー、アウレル、スタイン**の支那**トルキスタン**に於ける探究は、種々の材料と觀察とを吾人に供給し、其れによつて、精確なる記錄を有する世界の此の部分の乾燥の歴史を最後に記述し得るのである。

考古學上の證據によれば、此の地方は今や無雨の砂漠であつて、夏季の灼熱せる暑

氣及び眩目させる砂風と、冬季の極地的寒氣とのために、生物は一も存在し得ないが、嘗て十度は繁榮なる文明地であつたことが證明せられるのである。而して發掘された數多の古代の遺蹟で發見された銘文や、製作品などの研究によつて、斯かる遺蹟は、凡そ紀元前一世紀から紀元後第九世紀に亘つて、漸次に廢頽に歸したものであることが知られる。往時**ヒマラヤ**山脈の東西に谿谷及び山徑が開かれ、東にては支那から印度へ通じ、西にては印度から**バルチスタン**又は**アフガニスタン**を經て、波斯並に歐羅巴へまでも達する大通路が、絶えず交通に貢献する處あつたのみならず、多數の民衆の移住に便利であつた時代には、印度國が現今の如く孤立の狀態で有り得なかつたことは、印度史上の考察中重要なる思想である。

東洋からの侵畧者は、印度の人種や言語に變化を及ぼした程に大きく、文明の進歩又は文學上には記錄を遺さなかつたが、一方に西洋からの侵略者は、全土の特色を決

定するの力があつた。印度の古代文明を叙述する此の小冊子に於て、吾人は特に二種の侵攻者即ちドラヴィディア族とアリアン族とに就いて記する考である。

往々ドラヴィディア族は、印度の民族の起源だと想像されるが、併し其の起源は之れを多數の原始民族中に求める方が寧ろ至當である。斯かる民族は今も尙ほ山間の地や交通不便なる部分に住んで居るのである。印度の諸地方に住するゴンズ族の如きは其の一例であつて、彼等民族は石器時代の敎化を現時に至るまでも持續して、燧石製器具を使用し、弓箭を以て狩獵を行ひ、極めて原始的なる信仰を有つて居るのである。ドラヴィディ族が、有史以前に西南方から印度に來た侵略者であるとの見解は、バルチスタンの或る地方で使用されるブレーヒユー語が、南方印度のドラヴィディア語と、同系に屬するといふ事實によつて支へられるのである。而して彼等の印度侵略に先立つて、ドラヴィディアの古代の殖民地が存在したことは證明し得られるのである。何れ

にしてもアリアン族の來る以前は、ドラヴィディア族が優勢であつたのは事實である。今やドラヴィディア人民の多數は、アリアン語又は其の他の自己の本來の言語でないものを話して居るが、南方及び中印度の丘岡地方では尙ほ自らの種族の言語を用ひ、特殊の風習を保有して居る。之れによれば北方に於て著しく、アリアンの文明と宗敎とに影響したのは疑ひないことである。其の文學は耶蘇紀元後數世紀に至つて始まつたのであるが、南印度のドラヴィディア大王國の存在は、梵文學中及び極めて初期の記錄上に痕跡を留めて居る。

アリアンなる用語は、重にマツクス、ミユラーの著書の影響によつて、前には廣義に解して、印度歐羅巴語の全語屬を包含するものとして用ひられたが、今は殆んど一般に、古文書に用ひた劃然たるものとして嚴密に波斯及び印度族に限られて居る。

是等二群族には多くの共通した特質があつて、之れによつて兩者を他の群族から識

別し得べく、尙ほ此の事實に基いて、**アヴエスター**時代の**ペルシヤ**民族と梨倶吠陀時代の印度民族との祖先が、必ず國民として共同生活を營み、共通の國語を使用したのであると結論し得るのである。然るに其の分裂するに際して、波斯**アリアン**族は、**バクトリア**、**バルク**地方例へば**ヒンヅー**、**クーシユ**の北方なる**アフガニスタン**、及び波斯に普及し、一方の印度**アリアン**族は、南部**アフガニスタン**の**ケーブル**河の谿谷に於ける**ヒンヅー**、**クーシユ**の山徑を横斷して、**インタス**河地方即ち西北國境諸州と北方**パンジヤブ**に至つたのである。該分裂の年月は未だ確定し能はざるも、兩國民の有する最古の典籍に徵すれば、印度の梨倶吠陀は晩くも紀元前一二〇〇年代の製作なるべく、波斯の**アヴエスター**は、**ゾロアスター**時代から觀て年代が明かであつて、即ち大凡紀元前六六〇年から同七〇五八三年迄である。兩者の合一であつた時期から、彼等が分離した時代に至る隔りを推算するに足るべき確證はないが、兩國語を驗すれば、兩者の本源たる共通語は梨倶吠陀の用語と素質上の差違なく、字義上から云へば、**アヴエスター**の形式は、吠陀の形式よりも後のものであることは明かにして、又一般に聲音的變化の法則の應用によつて說明され得ることが知られるのである。されば印度に於ける**アリアン**民族の移住は、最古の印度典籍の作成から、久しからぬ時期を經た折に行はれたるものであることを推論し得るのである。

印度に於ける**アリアン**文明の進步は、自から大陸の地理的適合から定められたものであつて、該大陸は三つの文化ある地方に區別されて居る。

(1)西北印度即ち**インダス**河並に其の支流の流域地方。——此の方面は北及び西は山岳にて限られ、東は**レープテーナ**砂漠を以て**ガンゼジ**及び**ジヤムナ**地方と區劃せられて居る。故に往々南方では歷史上**ゲザレート**地方（**クーチ**及び**ケーテーウエール**を含む）と聯關されたのである。

(2)**ヒンヅスタン**即ち**ガンセス**及び**ジヤムナ**河並に其の支流の地方であつて、北部印度の大部分を成す大平原である。

(3)**デツカン**即ち南部印度(梵語の**ダクシナ**)。此の地方は**ヒビンディア**山嶺の南に在る大なる三角形の高原と、其の東西兩側の緣端を成す狹長なる平野とから成つて居る。

第一の地方のものは印度及び中央亞細亞間に變轉し得る特色であつて、波斯、希臘**シシツク**、**ハン**等に侵略に遭つたのである。故に其の人種、言語、宗教等は著しく不同である。第二の地方は幾多の大王國の建設された場所であつて、其の中には**ヒンヅー**及び**マホメツト**兩期に於て、何れも北印度の全部と南印度の顯著なる諸地方を包含した大帝國の征服によつて發展したのである。而して印度の宗教的並に知的活動の中心點は、常に此の地方に存する。第三の地方は自己の特色を有するものであつて、該王國の歷史と、諸王國間の主權の爭奪との爲めに、自から其の境界に出づることなきに至り、政治的には成功したが、知的方面は北印度の影響によつて、遲々たる進歩を見るのみであつた。が、一たび思想制度を享受した以來は、今や南部印度が種々の關係上最上の敎條であつて、大陸中で極めて保守的である程に强い維持力を以て之れを保有したのである。

古代印度の典籍上の記錄は、**アリアン**文明が、第一の地方から第二へ移り、遂に第三の方面へ達した期間の經路を、明かに吾人に示すのである。されど斯かる記錄は部分的であつて、文明の諸方面中の一の典型を表現するに止り、又特殊の時期にのみ文明が盛んであつた諸國のみを記述するものであることを忘れてはならぬのである。

此の事實を常に考へ居るにあらざれば、嘗て存在せなかつた政治的、宗教的及び社會的生活に於ける合一の印象を生じ易いのである。此の誤つた印象を正すべき最良法は、古代印度を研究するに際しては、常に近世の印度に對する見解と、一般歷史の知識と

を以てすることである。有史時代に於ける印度は、常に若干の大國と、更に小なる社會の集團とで成立つて居つて、各自に錯綜した競爭の歷史を有し、各々全然他國には依據せない特別な進步發展の經路を踏み來つたのである。印度も歐羅巴の如くに、幾多の選出國が順次に隣邦の協助を以て大帝國を創立することが續行された。乍去是等諸帝國の最有力なるもの即ち紀元前三世紀の摩竭陀國の**モウリア**王朝、紀元後第十七世紀の最終の年に最高潮に達した**デルハイ**の**ムガール**王朝と雖ども、印度全土を領有したのではなく、印度の極南地方は其の版圖には歸せなかつた。彼等の國土は征服に據つて獲得し、威力を以て保有したのであるから、一朝其の威力衰ふるや、忽ち該帝國を組成し居る諸州は、其の獨立を恢復せんと主張する。印度に於ける英國の領地は征服よりも寧ろ相互の利益によつて成立したものであつて、**ベルチスタン**及び**ビルマ**を除いて英領地の面積は七七三、〇〇〇方哩である。即ち主として大なる共通利害關係が、平和及び安全であるために、約六五〇名の侯及び地方官によつて管理される獨立國の面積(七四五、〇〇〇方哩)と殆んど同じである。如上の現象は歷史上其の類例を見ない處である。此の國の如くに群衆的で又種々なる國民中に在つて、完全な統率を形成し得る宗教は未だ曾て成立しなかつた。吠陀教に基く波羅門教の思考及び實行の系統も、其の經典の或るものに因つて想察し得るやうに、汎く世に認められたのではなかつた。是等の主權は**ガンゼス**及び**ジヤムナ**地方の如く優勢なりし場所に於てさへも、奢那教及び佛教などの革新的宗教と爭つたのである。加之其の要求は到る處住民中少數である高き階級に對して殆んど除外であつた。近世の印度に於ける如く古代印度の住民の多數が、思想並に實際に於て、一層原始的な信仰の後繼者であつたことは明かである。**クルツク**の說によれば、「住民の過半數即ち**ヒンヅー**、佛教徒、**ムサルメーン**の原始的宗教は、主として心理學的である。農民は名義上大なる神々を崇拜す

るが、疾病、旱魃、饑饉などの困難が起つた場合には、彼が救濟を要望する古い神々から來つた宗教である。」

第三章　吠陀時代

梨倶吠陀……口授傳承……地理學……文明の狀態
……宗教……後の階級制度の萌芽……セーマ吠陀
……ヤジュール吠陀……梨倶吠陀との對照……アタルヴア吠陀……吠陀時代に於ける北印度の主なる區分。

Veda

梵語の吠陀は、「知る」といふ意義の語根から出たもので、之れは羅甸語ではヴイテオとなり、アングロサクソン語ではウイタンとなり、英語のウイト、ウヰスドムを形成したものである。然るに吠陀なる語は、特に神聖なる知識の四集典を示す語として用ひられたが、是等の知識は、啻に印度宗教及び印度哲學の主なる系統のみならず、廣く世間出世間の兩方面に於てアリアンの智的文明全體の據て起る基礎を形成するものである。四集典中最も古きは梨倶吠陀即ち歌謠の吠陀である。該吠陀は千二十八節より成り、古代印度の諸神廟の種々の神々に捧げた供禮に伴はしめんとしたものである而して其の樣式及び歴史的特性から觀れば、之れをヘブリュー聖典のダビッド聖歌に比較すべきものであるが、句數は彼の四倍に達して居る。

國語の變化及び思想の過程に徴すれば、梨倶吠陀の歌謠が、廣汎なる期間に亘つて成立したものであることは、其の内容から證明せられる。是等は之れを作つた聖詩人即ち、リシスの一族で、代々傳承されたのであつて、後に至つて、尊敬すべき遺物が、神託ある聖典の性質を以て、彼等を待遇するに至つた際、該歌謠を編輯して廣き集典に整合し、先づ所傳の作者に由り、次に各部類の歌謠の示した神々に應じて分類したのである。梨倶吠陀も亦吠陀期に於ける他の所産物と同じく、口誦によつて悠久なる

古から、現代に至るまでも、世々傳承されたものである。今假にあらゆる草稿と其の刊本とが消失したとしても、該正文は各單語の形式と**アクセント**とを絶對的に保有したまゝで、活きた人間の口舌から恢復し得るのである。斯かる傳習は吠陀研究機關の驚くべき完備した組織に由つてのみ構成し得ることであつて、多數の學徒は幾多の世代に亙つて、此の聖典を修得し、之れを後進に傳へるために、幼より老に至る生涯を此の學寮に送つたのである。勿論是は人類の歴史上に發見される破れざる永續の最も稀有の例であるが、人類の記憶の著しい功績が、意義の變轉によるよりも、寧ろ言語の形式の精確な保存に關係したことを考ふれば、更に驚嘆に値するのである。波羅門教徒は、長年月間日々の祈禱や宗教上の修行に於て、吠陀經典の教のみを反覆して居つて、重要なる眞意義には毫も接觸せなかつたのである。併し口授の傳說が吠陀の學徒によつて忠實に保持されたから、吾人に傳へられた梨倶吠陀には殆んど異解異說が

成立せないのである。而して紀元前約七〇〇年以降恐く其の內容に變化を生せなかつたであらう。即ち之れは精緻な組立の語法が成立つた頃に近い時期であつて、此の語法たるや文章中の各語を前後の文意に拘らず、特出して記述したもので、以て本文の誤を防いで居る。されど吠陀中の辭句の多くは、約二五〇〇年前即ち**ヤスカ**が**ニルクタ**を記述した頃には、其の意義は五里霧中に在つて、殆んど解釋の望は絶へて居つたのである。實際上其の頃は吠陀の用語は殆んど神聖不可侵のものと考へられ、意義の不鮮明を以て、其の神聖なる特性を冒瀆することを防ぐ手段と目されて居つた。吠陀聖典の註釋家**セーヤナ**(紀元一三八七年歿)氏が引用した當時の俗諺によれば、盲者の見能はぬは、其の場所の過失ではないと謂はれて居つたが、寧ろ超人間的起源の信仰を强めるためであつた。現時と同じく當時も、**ヒンヅス**教義にては、吠陀は神の託宣の語であつて、人智の推測すべき境域を超絶したものだと信じて居つた。故に第十九世紀

の西洋の學者即ち何等の先入見を有せず、對象に直接して研究するに適した人々の手に委せられ、曾に梨倶吠陀の多くの章句の本來の意義を解明するのみならず、古代より遺承し來つた最も興味の深い價値大なる記錄の一として、全經典の史的意義までも解叙するに至つたのである。

梨倶吠陀の歌謠が、何れの地方で形成されたかは、其の地理的の判斷によつて明かに定められるのである。即ち殆んど總てインダス河系に屬する約二十五の河流が記載されてあり、其處には「五川地方」を意味するパンジャブの名の據て起る東部の五大支流のみならず、西北部の諸分流をも包含して居る。之れに依つて、梨倶吠陀當時のアリアン民族が、東南部アフガニスタン、西北部國境地方及びパンジャブ方面に亘る部分に住居したことが明かである。

是等民族は後世の侵略者と同じく、ヒンヅークーシュ山脈の徑路を經て、此の地方

に進入したのである。梨倶吠陀時代に續く梵文學によつて、吾等は其れがジヤムナ及びガンゼス兩河の平原地方に確立された時代以前に於ける東南方面のアリアン文明進歩の經路を考察し得るのである。前記の二大河流は梨倶吠陀時代に既に著名であつたが、其れは單に地理的境界の極限線を形成するに過ぎなかつたのである。

梨倶吠陀所載の文明の典型は、究極原始的なものであつて、教化程度の遙かに低い從屬した人民の中で、多少進んだ軍隊所屬貴族のものであつた。白色人種たるアリアン民族と、黑褐色であるダシウス民族との間には廣き間隔があつたのである。ダシウスなる名は、稱呼其のものが傲慢を意味するものであつて、常に之れを征服し、使役する魔神てふ意義を包有して居る。斯かる皮膚色の差別は印度固有の階級制度の發展する第一階段を示すものであつて、後には世界各國に類例なき嚴重にして又複雜なるものとなつたのである。

戰勝民族は一般に五種民族と呼ばれ、かゝる區別は種族の數に因つたものであるが、五種族中の若干は、後の印度史上に其の痕跡を遺して居る。**アリアン**種族は必しも在來の住民に敵對するに止らず、同族相互の間にも鬪爭を生ずることであつた。さて各種族は一王の下に統率されて居つて、かゝる主權は常に世襲であつたが、時として選定に由ることがないでもなかつた。他の印度歐羅巴民族間に於けると同じく、種族の制度は、家族の制度に則つたものであつた。而して王は、各族を代表する年長者の會議の協贊を俟つて規則を制定するのである。社會狀態は既に斯くの如く遊牧民の域を脱して族長制度が行はれて居つた。民は村落に住み、牧畜と耕耘とを其の生業として居つた。

鬪爭の具として刀劍、槍、斧なども用ひられたが、主なる武器は弓箭であつて、軍隊は步兵及び軍用車隊で編成されて居つた。而して步兵は古代の希臘及び日耳曼、現時の**アフガニスタン**に於けるが如く、村々部落々々を進行したものであつたらしいが、次の軍用馬車は貴族のみの使用に供せられたもので、一人の戰鬪者の右に一人の馭者が乘組んで戰場に出るものであつた。

又一面に平和的事業も著しき進步を遂げ、機織、工匠、鍛金の技術に就いては、歌謠中に多くの譬諭が引かれてある。主要な金屬は金と銅とであつて、銀及び鉛は、梨俱吠陀時代に既に存在したか否かは疑はしい。

當時愛好された娛樂中には、狩獵、馬車競走、骰子遊び等があつて、就中骰子遊びは吠陀時代並に其の次期に亘つて行はれた。

印度の侵略者たる**アリアン**族の宗敎も亦、同じく印度歐羅巴族即ち希臘人、羅馬人、日耳曼人、**スラブ**人等の他の古代民族に於けると同じく、其の形式は自然崇拜であつた。上天、蒼空及び大地が尊信されたのである。茲に因陀羅（漢譯帝釋天）と呼ばれ

るものは、司風の神であつて、其の雷轟を以て妖魔の強力を碎破して奪略に遇へる牝牛を恢復し、又電光の如くに暗雲を透貫して地上に雨を降らせる能力を有する偉傑である。然るに火の神**アグニー**（羅典の**イグニス**）は天に在つては太陽と現じ、蒼空に於ては電光となり、地上にては護摩木の摩擦によつて神祕的に發生した供火と現はれるものである。犧牲は神人感應の媒助であつて、神は供物を歡受し、之れが酬として敬虔なる信徒に天福を授ける。即ち牛馬に對しては富、强健なる兒童に對しては力を與へるのである。さて此の宗教の他の一面を觀察すれば、凡そ肉體を離れた精靈は、父の御國に住むものであつて、其處では食物は、子孫の捧ぐる供物に埃つのである。而して嘗て人類を圍む誘惑は、餓饉と疾病との惡鬼であつたが、かゝる奸惡なる來襲、は慈愛ある神々の御惠による外、之れを避くる手段はない。

吠陀の神話の或る部分は、他の印度歐羅巴民族のものと共通である。其の例證を擧

ぐれば、梵語で「大空の父」なる意味の語は、希臘語の**ツオイス**、**パチール**、羅典語の**ジユピター**、**アングロサクソン**語の**ツユー**と同じく、梵語の「曉」といふ語は、希臘語の**エオス**、羅典語の**アウロラ**、**アングロサクソン**語の**イースト**の意にて、即ち英語の「東方」である。

古代波斯の宗教との類同點は更に著しく、印度**アリアン**族と波斯**アリアン**族とが、印度歐羅巴系に屬する他の系統から分離した後、或る期間共に居住して居つたことを證據として考へると、**アヴエスター**を以て代表される波斯の宗教は、古代神話と大部分は別のものと思はれる**ゾロアスター**教（紀元前六六〇——五八三年）改造の結果であると考へざるを得ない。乃で是等の二宗教が、共に享受した一の特異なる性質を記述せねばならない。例へば吠陀教所用の供物の一たる蘇摩と稱する植物性釀酒は、**アヴエスター**教で用ふる**ホーマー**に酷似したものであつて、其の名稱は字義上から觀て

兩者同樣である。

梨倶吠陀の歌謠は、僧職に在る作家の詠じたものであるが、作者等は詩人としての技倆に多少自ら賴む處があつたのである。往々同一題目のみに陷り、又主として該國語及び該時代に對する吾人の知識が不完全であるために、多大の困難と貧弱とを感じて、歌謠は頗る單調に思はれるが、尙ほ其處に多くの美と力とが存在して、作家の自信を認むるに足るのである。詩を評價する原則は、各行の綴の數、第四及び第五綴の終の句讀、並に希臘語羅典語に於けるが如く分量に由つて定められるのである。但し嚴密なる長短の法が、概して行の終端を制限することは例外である。最も普通に用ひられる韻節は八、十一若くは十二綴を以て行を成し、通例斯かる行の二若くは四を以て一首を形成するのである。されど更に一層複雜な構成を有する種々の變形が用ひられる。

此の故に僧職に在る人々は、犧牲進獻の儀式に精通するを以て足れりとすべからず、又多少は作歌の技能を有せねばならない。族長は本來世間上の俗務に於けると等しく、出世間の作法にも亦首長たることは明白であつて、古代に於ける事物の狀態の一端は、梨倶吠陀によつて推測され得るのであるが、分業の關係から自然、王の便宜上、實際には犧牲の常例の作法は、之れを特に指定した一人の僧職に委ね置くのである。而して該僧職たるや是亦世襲職であつて、宗教的傳習の有力なるに伴つて益々重要となるの傾向を有して居つたのである。

印度特有の四姓嚴別の制度は、最晩期の歌謠の一に於てのみ明記され居るに過ぎずして梨倶吠陀時代の初期に在りては、未だ全く知られなかつたのであるが、斯かる制度を誘起すべき社會狀態は、此の時既に現はれて居つたのである。既記の如く、先づ征服者及被征服者を二大別することは、其の各民族の皮膚の色に基いたものであつて、

實に梵語にては「階級制度」なる語は「色」と同語である。是れ後に至つて二種の族姓の間に設けられた廣汎なる區劃の基礎たるべきものである。即ち神聖なる綱目の叙任に因つて正しく宗教界に編入さるべきもの及び卑賤なる階級即ち首陀羅（スードラ）である。更に之れを三區分して統治者卽ち刹帝利（クシヤツトリ）種、僧職即ち波羅門（ブラーマナ）種並に農民即ち毘首（ヴアイシア）種とするのであるが、此の制度は他の印度歐羅巴種族社會にも存在するものであつて、同樣に進歩した諸の人類社會に、共通に現出すべき機能の、自然的に分配されることを代表するものゝ如くに思はれるのである。

印度の原始時代の住民に關して梨俱吠陀中に載せたる處は彼等が牧民であつて家畜の大群を所有し多數の堅牢なる砦塞を備へて敵を禦いだとの事實に過ぎない。或人の記述によれば、彼等民族を蔑視して、皮膚は暗褐色を呈し、顏面扁平にして、無鼻なる種族なりと稱し、其の言語は缺舌の音にして解し難く、所奉の宗教的作業は、其の征服者の嫌惡を招くべきものであつたと說いて居る。

他の三種の吠陀の二種は、直接に梨俱吠陀に依據するものであつて、梨俱吠陀から選拔した歌謠を諳誦するホーターに隨伴して、犧牲の事に與かる二種の階級の僧職の常用に供するために、特に作製したものである。而してサーマ吠陀は、歌謠を司る僧職の便宜を圖つて主に梨俱吠陀中から抽出した詩句で成立つたものであつて、史的價値を少しも有せぬものである。次にヤジュール吠陀は、儀式の作業部を構成するアダヴアリウに屬して說かるべき犧牲の法式を說いたものであるが、一方には當時の史的記錄として極めて重要の位置を占むべきものである。即ち其れは啻に吾人に新見解を誘起させるのみならず、宗教上及び社會上の事象を融通させる力を有して居るのである。

ヤジュール吠陀は、アリアン文明が、西北部地方から印度の中央大平原地方へ擴充

して行つたことを示すものであつて、其の中に叙述したる地理學は、**タルス**地方即ち**スートレ**と**ジヤムナ**とに介在する東部平原と、**ジヤムナ**と**ガンゼス**との間の東南部に屬する**パンケーラ**とである。此の地方は、**サラスヴァチー**河（**サルスーチー**地方）と**ドリサドヴァチー**河との間に在る聖地を以て其の兩界を限られ、彼の複雜なる波羅門教の犧牲制度の發達した土地である。後に至りては、印度に於ける**アリアン**侵略者の當初の居處が殆んど閑却され終つたに拘らず、「聖者の地」として特に尊敬されることとなつた。**クルクシエトラ**は又、國民的叙事詩である**マハーバラータ**の主要の題材となつた大戰爭の舊蹟である。**インドラプラスタ**即ち後世の**デルヒイ**は、此の地方の都會の一であつて、**ムガール**王朝に於ては全印度國の首都となり、最近世即ち一九一二年には往時の盛觀を復興するに至つたのである。

此の時代の宗教の性質及び社會狀態は、**ヤジュール**吠陀中に顯れたるが如く、之れを梨倶吠陀時代に比すれば、其の差異顯著である。宗教に於けるあらゆる道德的要素は、儀式が從來のやうに崇拜の手段ではなくて、其れ自らが目的となつて、規制が錯綜するに至つた爲めに隱滅し了つた。梨倶吠陀中で罪惡と稱するのは、全宇宙を統轄する聖律に違背することを指すのであるが、**ヤジュール**吠陀で罪と呼ぶのは、之れと異なりて、其の故意であると偶發であるとを論せず、生より死に至るまで全生涯に亙る宗教上の作法の無限の繼續中にて、或る細目を等閑に附したことを指すのである。犧牲は超自然力が到達し得る方法によつて進歩して、一種の法術となつた。而して斯樣に收得した威力は、善又は惡、出世間的又は世間的、尙ほ神其のものをも制約するためにも用ひられたのである。實質上から觀れば其の形式を現代まで保持し來つた階級制度の古代に於ける狀態は、**ヤジュール**吠陀中にも明瞭に認められる。社會の階級上に四大區別が嚴然として存在して居るばかりでなく、若干の雜和した階級も之れに

記載されて居る。斯くの如くして階級制度の概觀は、後には商業などに基く分化の度の進んだ爲に著しく複雜となつた。儀式のために僧徒の手に收められた顯著なる精神的威力なるものが、社交上此の階級を優秀の地位に置いた直接原因であることは疑ひない。

ヤジュール吠陀に於ける宗教並に社會制度は、梨倶吠陀中に明かに認められる筈である傾向を、更に廣い範圍にまで發展させて表はして居る。乍去一方では又古代印度の非**アリアン**民族の有して居つた宗教信念と社會組織との影響を明示して居つて、其の影響たるや往々其の痕跡を認め得るのである。たゞ一例を擧げると、印度の原始民族間に共通である蛇崇拜の風習の如きは、梨倶吠陀中には其の痕跡を見ず、**ヤジュール**吠陀に於て現はれて居る。之れに據れば該風習が、古代の非**アリアン**民族から由來したとの推斷を得るのである。

アタルヴァ吠陀は他の三吠陀と異なり、祭式とは直接の關係を有せないで、之れを梨倶吠陀に比すれば、概して一層通俗的なる色彩に富んで居る。此の吠陀の示す處は、僧職の進歩した見解ではなく、惡魔並に魔法禁呪の効力に關する古代民族の一般信仰の有樣である。其の結集の時代は之れを梨倶吠陀に比して晩れて居るが、題材の大部分が、宗教の原始の範圍に屬するが故に、古代文明史上には梨倶吠陀よりも其の價値は一層勝れて居ると言つても差支ない。療病に用ひた其の呪法は、樹木に比すべき是等の魔法の內に、後世の醫術の萠芽を包含せしと認むべきものなるが故に、**アタルヴァ**吠陀は又印度の科學發展の史上にも特に重要なものである。

アタルヴァ吠陀にて與へられる地理學上の知識は、之れが編纂された場所を決定するに有力であるのみならず、其れに記載された種族によれば、吠陀期の初期及び後期に亙つて初めて**アリアン**文明が普及した二地方即ち**インダス**河地方と**ガンゼス**及び**ジ**

ヤムナ河地方の範域が、此の吠陀が作られた當期に既に知られたことが示されて居る。

アリアン文明は久しくかゝる區域に局限されて居つたのである。而して全版圖並に其の主要なる區劃は、摩努（マヌ）の法典を以て指定されたのであるが、此の法典たるや、現存せるものゝ製作年代は後世であるけれども、吠陀時代からの傳説を表示するものなることは疑ひない。

アリアン地方の一たるアリアヴァルタは、ヒマラヤ、ヴィンデア兩山脈間に横はりて、東海から西海まで擴がつて居る地方である。

中央地方のマディアデスアは、同じ兩山脈に介在するアリアヴァルタの中央部であつて、其の境界、西はサラスヴァチイ河が沙洲となれる場所であるヴァナスアナにして、東はガンゼス、ジアムナ兩河の會流點である近世のアラハバド即ちプラヤガに達する。

聖地に屬するプラマルシイデシュアはクルス、マシアス、パンチアラス、及びスウラセナスを包含す。即ちパチィアラ州とパンジャブのテルヒイ區の東半部、アルウアー州及びガンゼス、ジヤムナ兩河間に介在するラプタナ地方の接近せる部分、聯合州のムツトラ地方などである。

神聖視さるゝプラマヴァルタ地方は、聖河サラスヴァチイ（サルスチイ）と、ドリサッドヴアチイ（コータン）とに介在して、概して近世のシルイレドと合致するのである。併し其の精確な位置に就いては、此の地方の諸河流たるや、多くは沙洲にて流を絶たれ、往々若干哩を隔てゝ再び現出するなどのために其の流系が判然せない故に多少は不確かである。プラマヴァルタがクルクシエトラの一部分を形成したことは、次に示すマハバラタ中の詩句によつて推知し得られる。

「サラスヴァチイの南部及びドリサドヴァチーの北部に對してクルクシエトラに住む人々は天に於て住む」云云

第四章　ブラマナ及び優婆尼汝土時代

散文の進歩……ブラマナの内容……言語……地理……サタパタ、ブラマナ……佛教及び古代梵語叙事詩との關係……實行的宗教と學理的宗教……優婆尼沙土……萬有神教……僧職以外の知的活動、

茲に叙述した印度文學の最古の作品は、殆んど總べて韻文であつた。是れ即ち文學發達上、散文よりも詩が先づ發展する一般法則に依つた現象である。吠陀中の唯一の例とすべき散文は、**ヤジュール**吠陀の或る章の中に在つて、其れは韻文の部分に關聯した註釋の一種たる場處である。此の點から同性質の散文の大文學が發達し行く經路を考究し得るのである。各種の吠陀は、之れが研究に全然、身を委ねる數派の僧職によつて傳習的に繼承された。而して該派は、何れも年月の經過するに從つて、各自に特

種の所依經典を組成するに至り、其等經典は、巧妙なる散文體の論文にして、聖儀典禮の或る部分の神秘的意義を、僧徒に説明することを努めたものである。是等論文の態樣は、**ブラマナ**即ち教義要集抄風に據つたものである。其の内容を觀れば、極めて多樣なもの丶混雜したものであるが、概略、次の三種に分類し得る。即ち

(一)命名
(二)解説
(三)神秘的思索（優婆尼沙土（ウパニシアット））

是れである。此の三者中、優婆尼沙土は、更に充分なる發達を遂げて、同じ名稱の特種の典籍となるに至つた。**ブラマナ**は、複雜なる儀式と密接の關係あることが考へられる。而して吠陀教則の各分脈を精密に説明したる後代の經典が、若し不幸にして存在せなかつたならば、吾等は**ブラマナ**の意義を解し得なかつたであらう。

Brahmana

ブラマナは、之れを最狹義に解して、限定した意義から云へば、教義の典籍である。何となれば先づ其の内容は、頗る歴史的要素に乏しく、其の存在せし當該時代並に國土に於ける政治及び社會狀態に關する記述も、單に偶然的のものたるに過ぎない。甚しきは宗教に關する事柄さへも、其の見解は、全く一半面の觀察に止つて居る。乍去、宗教は斯かる僧權時代に於てさへも、他面に於て更に高尚なる狀態に在つたものにして、其の記錄の世に存するもの即ち優婆尼沙土である。

然れど**ブラマナ**中には、原始人類の文化史上に有力なる證據を提供する古代の傳說が、多々含有されて居る。例へば、梨俱吠陀中の**アイタレア**、**ブラマナ**に在る、**ヴァルナ**の神に捧げられる**シュナセパ**と呼ぶ波羅門に關する話によつて、著しき太古の時代に於て、人間の犧牲が行はれたことが回想されるのである。該作法を行ふ時は、至上神は其の體姿を示現して、行者の罪障を免除すると言はれてある。同じ教典中の他の一例を擧げると、献供の儀式に於て、眞の人間を犧牲とする代りに最初は或る動物を代用し遂には米製の菓子の類を以てするに至つた推移の階段が判然する、

又時としては**ブラマナ**から、印度の社會及び政治狀態に關する有益なる記事が蒐集される。前記**アイタレ**、**ブラマナ**の第八卷中に記載せる即位の儀式に就いて觀るも、當時の僧職階級なるものが、少くも原則としては、王者の輩に越へて、優勝の位地を占めて居つたことが明かに知られるのである。該書には、更に其の名稱のみが傳來せる南方印度の諸國民の地理的汎布の限域を示し、又印度の各別の諸地方で用ひた王の稱號をも記載されて居る。而して是等の稱號によつて、當時即ち初期に於て、純然たる王國から、自治制度に至るまでの種々の政體の存在を考へ得るのである。後世の銘文並に他の歴史上の原因から知り得た處に從つて、此の說明が得られる。波羅門系の宗教が、**アリアン**系統の諸部族を除外したのは、興味ある事實にして、此の事たるや

儀式の一たるタンディア、ブラマナ中に在る記事の内に散見して居る。然るに該教典はアリアン民族が、波羅門社會に入ることを允許されて而して完成したのである。是等波羅門系に屬せざるアリアン諸民族に關する記事の一例を示せば、曰く、「斯かる民族は、農業若くは商業に從事することなく、彼等の法律は常に錯雜の狀態に在り。彼等は波羅門的の祭儀を受けた輩と、同一の國語を使用して居るが、容易く語り得る語の發音にも困んで居る云々」。彼等はプラクリット、若くは梵語と關聯した方言を使用する徒輩であつた。

言語の研究に取つては、ブラマナは最も興味の深いものであつて、言語學上の範例を多々藏有して居つて、完全なる鑛山に比すべきものである。其の形式の上には、一大變形を呈し居れるが、該形式たるや、梨倶吠陀から古典的梵語に至る言語間に傳承されたものである。而して印度歐羅巴語の散文の最古の實例たるヤジュール吠陀の散

文の部分に伴つて居つて、之れは散文形式及び通例の韻文に於いて用ひられるよりも、更に一層複雜なる組成法の極めて初めの有樣から、發展し來つた經路を研究する上に、資料を提供するものである。同一の時代に相並んで印度に存在して居つた古代の詩と、原始的の散文とに就いて考へるに、前者は其の性質に、最早や幼稚なる痕跡を止めず、數世代の詩人等によつて精巧なものとされたが、後者は往々兒童若くは無教育な人々が、文字に依つて自己の思想を發表しやうとする最初の企圖に用ひたことが知られる。

ブラマナの行はるゝ地域は、概して、聖地と稱せられるクルス及びパンカラス地方である。されど時には此の地方よりも、更に西若くは東の方へ及んだこともある。サタパラ、ブラマナは、著しく廣い區域に特に及んで居る。是等教典中の或るものは、西北方に於けるアリアンの侵略者の最初の任地に屬したものである。其の他はクルス

王ジヤナメヤヤ朝からヴィデア王ジヤナカ朝まで變遷し行いた。第一の典籍に於ては、ヴィデナ（ヴィデアの古形）王マタヴァに關する話說によつて波羅門の文化が薩羅薩（サラスヴァ）伐底（アヂィ）の聖地に起つて、先づコサラに入り、次には其の境域を成せるサダニーラ（恐くはガンセスの支流たる大ガンダクであらう）河を超へてヴィデアにまで及んだことを認め得られる。

シアタパタ、ブラマナは、印度の宗敎史及び文學史の上に、重要なる繫關を與へるものである。是れ一方には佛敎と密接なる關係を有し、他方に於て、古代梵語の叙事詩と連絡を持つが故である。後には佛敎の特有に歸した多數の術語、例へば「聖人」「隱者」の如きは、其の始源をシアタパタに有する。之れに記されたる著名なる敎家中には、佛陀の生れた刹帝利（クシヤツトリア）種に用ひられた瞿曇（ゴータマ）なる姓氏を稱する波羅門族がある。マハバラータと呼ばれる一大叙事詩の話は、クルス王ジアメヤヤに關係を有すると傳へられて居る。然るにヴィデア王ジアナカは、他の大叙事詩ラーマヤーナの女主人公たるシーターの父であるジアナカと多分同一人であらうと思はれるのである。

ブラマナの儀式の講究は、際限なく、單調にして索漠たるものであるが、之れを救ふべき一般の興味の特性の一端は斯くの如きものである。既述の如くブラマナ中に記述された宗敎たるや、全然器械的にして又不徹底である。梨倶吠陀から出た歌謠は、最早や其の意義の如くには用ひられなかつた。韻文は前後の文意に拘泥せずして、想像の自由を得るに至つた。是れ其の用語中に往々幻想的のものを含有し、音綴の增減に從つて配列すれば、韻節の方法が、其の敵を降伏する武器の如くに、効力を有するが故である。

波羅門族徒の威權を保存し、通常の民衆を其本來の地位に保留するためには、かゝる制度が頗る必要であつた。されど其れが波羅門族の人々自ら知的慾望を滿足させ得

たとは想像されない。而して實際に於て、印度にては實行的宗教と知識的宗教との間には、著しい區別があつた。前者は、世俗民衆のために、又宗教的生涯の初期の狀態のために建設されたものであつて、後者は單に知識上の貴族政體たる位地を占むるのみである。梨倶吠陀及び**アタルヴア**吠陀中の回想の歌謠は、超越せる力の存在及び性質、其れが宇宙と人とに對する關係に就いての永久の問題が、既に此の初期に於てさへも、賢者の思考に上つて居つたことを示して居る。吾人の既に考察した如く、學理的思考が、**ブラマナ**中にさへも、存在するのである。されど之れは、優婆尼沙土と稱する經典に於て特に發展を遂げた。優婆尼沙土は通例**ブラマナ**の終尾に置かれて、其の內容も變じて別に**アラニアカ**として行はれて居る。吠陀教文學は廣く考ふれば「天啓」と「傳說」との別あり。而して二大部類に分別される。即ち吠陀の聖典と**ブラマナ**とは實行的宗教に屬し、**アラニアカ**と優婆尼沙土とは知的宗教に屬するのである。

同じ區分の原則を適用して、波羅門の生涯を學理的に四種の宗教的階段に分つのである。即ち第一期に於ては、家族の一員としての生活を營み、聖典を學び、拜禮の作法等を習得するを務とする。年長じて第二期に至れば、婦を娶りて家庭を組成し、總ての家務を宗教的に處理するのである。次に來る第三期に在りては、兒孫を設けた後、單身若くは妻と共に、山林中に隱遁し、仙人の生活を營む。最後の第四期に於ては、人間界のあらゆる羈絆を離脫して、大靈を靜觀することに一身を委ねるのである。斯くの如く、波羅門の生涯は、實行方面と、知的方面との二つの宗教生活に分たれるのであつて、第一期及び第二期は前者に屬し、後の二期は後者に屬するのである。

優婆尼沙土は、之れを宗教と稱するよりも、寧ろ哲學と呼ぶを適當とすべきものであつて、之れによつて、梨倶吠陀及び**アタルヴア**吠陀中の哲學的意義を有する歌謠が、

精靈と關聯するのである。されど印度に於ては兩者は決して分離することなく、宗教は常に哲學の必須の準備たるの關係を有するのである。正統なる教義は、社會制度及び波羅門教の宗教的儀式の信仰に於て成立する。此の外に何等の制限なき自由なる思索行はれて、萬有神論、二元論は勿論、往々無神論をも生ずるに至つたのである。

優婆尼沙土は組織的でなく、形而學的論議を、順序正しく解說したものではない。其の唱道する見解に對しても、何等の理由をも與へて居ない。優婆尼沙土を作成した思索家は、哲學者と云ふよりも、寧ろ詩人であつた。されど之れに拘らず、該教典の中には、後の組織的哲學の萠芽たるべき、總ての主要なる思想を含有して居つた。故に印度思想史上の最も重要なる位地に置かれるのである。

知的宗教の對象とする處は、現世の幸福でもなく、又天の恩惠でもない。かゝるものは何れも實行的宗教によつて求める處の功果である。然るに印度の思想によれば、

人間及び天界の悅樂は、共に等しく暫存的のものにして實在の相を誤認して居る世俗の輩が、追求すべきものたるに過ぎない。聖者は、修行證果の功によつて、凡そ人間の靈魂たるや、現生の械鎖に緊縛されて其の自由を失ひ、此の世界若くは他の世界に於て、生々轉輾し、現世に生存する有樣の條件は、前生に遂行した善惡業によつて決定されるものだと瞭知して居る故に、是等暫存的悅樂をば更に顧みない。茲を以て聖者が唯一の目的とする處は、生死輪廻の縛着から「解脫」を得ることである。而して此の「解脫」を得るには「正知」の一路あるのみ。換言すれば、「宇宙精神」と稱すべき最高にして又眞の意義に於けるもの、外、あらゆる存在を捨脫することを完全に實現するのである。實に森羅は悉く「宇宙精神」に歸一し、「宇宙精神」亦森羅萬象たり。世界は唯心所變にして、何等の物の存在を許さず、「宇宙精神」の外別に存在せるが如くに感せらるゝ萬物は、是れ皆吾等が幻想にて成つたのである。是等は宇宙精神が、たゞ其の名稱と

Pantheism

形式とを變化して成つた或る變裝たるに過ぎない。恰かも粘土で造つた諸種の器皿は、如何なる名稱を以て呼ばれ、如何に多くの異なつた形に作られても、其の實質は、一の粘土に外ならないと同理であつて、種々の事物が、各々單獨に存在するかの如く吾人に感ぜしむると雖も、是れ畢竟、「宇宙精神」の變容である。此を以て「個人精神」と「宇宙精神」との間には、何等の本質的差異あることなし。此の現象を充分に理解すれば、茲に「正知」が顯現して、今や浮世は皮相のものにして實在體ならぬことを明かに瞭解し、其の縛輪から解脫し得ることゝなるのである。

此の萬有神論的教義は、優婆尼沙土の題目の主要部を成すものにして、後世に至つては、吠檀多哲學に於て著しく完全に、又精密に發達したのである。印度の靈的及び知的生活を形成するに就いて、現時に至るまで、他の何等の事象よりも、一層大なる力を以て其の影響を及ぼしたのは、此の教義である。

最古の優婆尼沙土は、後期の**ブラマナ**時代に屬するものであつて、又最も重要なるものたることは、言語に據つて證明される。印度の宗教及び文化の歴史の淵源に在りては、二種類の言語が、互に補正の作用を遂行して居る。宗教方面に於て、**ブラマナ**の用語は儀式的であつて、優婆尼沙土の用語は知的である。而して是等兩語の社會上の狀相は、著しき反對の樣を示して居る。犧牲を捧げること並に之れに屬する種々の儀式は、すべて全く僧職階級に在る人々の手に委ねられてあるが、王族の人々及び學識ある貴婦人達までも、朝廷にて催される論議の席に列つて、「宇宙精神」の本質に關して、熱心に意見を發表し、自ら明瞭なる解決を得るのである。著名なる波羅門**ガルギ**ア、**バラキイ**が、**カシイ**王**アジァタサツル**の許に來つて、知識に關する其の說を聞いて後、謙遜なる態度を以て、其の弟子たるを許されんことを請ふた。然るに**ガルギイ**及び**マイツレイー**兩夫人は、此の重要事項に就いて、**ヴィデア**王**ジヤナカ**の朝に在る大

リシユィのヤアジユナヴアルキアと論談を試みたることもあつた。優婆尼沙土の時代は、實際上、精神的の動搖著しく、心ある人々は常に不安の狀態に陷り、又波羅門の制度の形式主義と制禁手段とに反抗する革命的氣運の漲つた時代であつた。此の革新に由つて、王族の徒が、主要なる部分の一に列することゝなつて、遂に次章に說くが如くに重要なる宗敎的革新の二大首唱者たる族那敎及び佛敎の祖は、共に王奢の裔孫から出たのである。

第五章　奢那敎及び佛敎の興起

奢那敎及び佛敎の創始者……波羅門敎に反せる兩敎の敎義……兩敎の文學……梵語の叙事詩……「プラナ」……系譜……巴利語の叙事詩……スートラ、

奢那敎及び佛敎の興起は、印度史上に一時期を劃するものであつて、爾來、略々正確なる時代が示されて居る。されば今や思想と言語との繼續せる狀態の進化に必要なる年序の長さを計算する場合に、從來の歷年史錄に依據するの要を見ざるに至つた。

奢那敎及び佛敎は、之れを在來の波羅門敎に比すれば、兩者の間に著しき差違を呈し、吠陀經典及びブラマナ中に敎示する如き實行的宗敎を排斥するに至つて居る。詳に言へば、吠陀の敎義と之れに基く献供及び典儀の全法式の權威を否定するのである。而して之れに由つて波羅門敎の敎系から脫逸したのである。他方に於て其の原始思想は、優婆尼沙土によつて代表されたる知的宗敎の敎系の實質を具備して居る。該思想たるや、あらゆる印度宗敎及び印度哲學の主眼とする處にして、其の考によれば凡そ個々の靈魂は、當該個體自らの業(カルマ)の繫縛を蒙り、無窮の生死に輪廻して際限を知らず、靈魂をして斯かる無窮の轉生から離脫せしむべき方法を探求するを以て目

的として居る。出離解脱を得る方法、又宇宙と個體精神との性質に關し、並に優婆尼沙土所談の宇宙精神に對應する、本體若くは第一原因と呼ぶべきもの〻存否に就いては、兩敎の說く處は相違して居る。

奢那敎の開祖**ヴァルダマナ**、**ジナタプトラ**の在世は、多分紀元前五九九年から同五二七年までゞあつたらしい。其の姓名に由つて知られる如く彼は刹帝利(クシヤトリヤ)種の苗裔にして、**ジユナタ**の王族の一人であつた。而して**ヴィデア**の**ヴァイサリー**王家と親族の關係を有して居つた。現在にまで傳はれる如く、彼の敎法は、精密なる形而上學的のものであつた。されど別に其の重要點を約言すれば、其の目的とする處は、所謂「三寶」の手段に因つて、靈魂をして、生死界の束縛から逸脫せしむるに在るのだ。而して此の「三寶」と稱するものは、佛敎に於て斯く呼べるとは、全く其の意義異にして即ち正信、正知及び正業の三を指すのである。是等の「三寶」は、再三分劃され、以て生活上の數多の規範となるのだ。

奢那敎徒は、多數の大都會の交通上に、豐富にして且つ重要なる區分を形成して居る。其等は特に西印度に在るものにして、其の地方にて、彼等の祖先等が、**グジアラ**の壯麗なる寺院として永久の記錄を遺して置いた。而して又彼等は南印度の文化の上に、顯著なる地位を占めて居る。乃ち該地方で、**カナルス**及び**タミル**語の夙に、文學的發達を遂げたことは、奢那敎僧徒の勞務大に與つて力あるのである。

佛敎の開祖佛陀は、其の敎徒からは「覺者」と呼ばれて居る。幼名悉達多(シダルダ)、紀元前約五六三年から同四八三年まで生存して居つた人らしい。彼は刹帝利(クシヤトリヤ)種の釋迦氏に屬し往々釋迦氏の賢者なる意義にて「釋迦牟尼」と名づけられる。されど刹帝利種族間に行はれた慣例に從へば、吠陀**リシユイ**の古き種族の一から由來した波羅門種姓瞿曇(ガウタマ)の家に生れたのである。釋迦氏は、現今尼波羅(ネパール)の西部**タライ**として知られる地方を管掌し

て居つて、其れが佛陀時代にはコサラ王の領主であつた。輓近、此の地方に於て、考古學上最も興味に富む發見が遂げられた。其の發見物たるや即ち紀元前二四四年に、佛教信徒たる阿育王(アショカ)が、佛陀誕生の地點を標識するために建設した銘柱である。是れ佛陀の事蹟を考ふる上に最も多大の興味を與ふるものである。

佛陀は當時の厭世主義に負ふ處あり、其の所談常に吾人に教ふるに、諸法空寂一切皆空の理を以てし、自ら現世を隱遁して、存在の埒から逸脱すべき方法を追求したのである。初めは優婆尼沙土中に表はれた宇宙精神の教義中に之れを求め、次で峻嚴なる禁慾苦行の方法によつて之れに達せんと努力したが、何れの教も佛陀の心を滿足させるには至らなかつた。乃で佛陀は久しき間沈思默想に耽つた後、やがて自ら悟道を得た。其の教旨を約言すれば、ベナレスに於ける佛最初の說法に於て、四條の要項が示されて居る。曰く、苦集滅道。佛教にて之れを四諦と稱す、苦とは現世の苦痛の總

稱、集とは此の苦相を生ずる原因即ち業因、滅とは斯かる苦相の世間から脫離すること、道とは脫離すべき方法をいふ。詳言すれば總ての存在は擧げて苦痛である。此の苦痛たるや生存に對する各個人の貪着に起因するものであつて、個人の死後、更に再生の果を招くのである。故に此の原因たるものを消滅させれば、其の結果たる苦痛は、自から消滅するのである。而して其の苦の因を滅するには次に示す八正道の法を修せねばならない。八正道とは何ぞ、曰く、正見、正思、正語、正業、正命、正勤、正念、正定の八種である。茲に佛陀の八正道なるものは、奢那の說ける三寶と、本質上一致するものであつて、兩教の優婆尼沙土と異なる主要點は、解脫を得るための方法として、抽象的なる正知に代ふるに、實行上の規範を以てすることである。

奢那教及び佛教は、實質的に其の組織が、波羅門教と異なつて居る。波羅門教は嚴密なる階級制度を以て局限され、該制度に於ては、人間の社交上及び宗教上の義務が

其の身分によつて決定されるのである。然るに奢那教及び佛教は、世界の範圍を更に廣汎ならしめ、教理上には、宗教界中にあらゆる階級の區別を滅盡して居る。現今に於ては、奢那教徒によつて注目せられるが、數百年前には、印度に於て、佛教徒を同化したのである。

波羅門教は獨創のものにあらず、其の儀式の半は個々に行ふべき族制上の義務より成り、他の半部は、僧徒が特に其の必要上行ふ處の献供其の他の儀式から成立して居る。此の故に古代に於ては、特に波羅門教の寺院が存在せなかつたのである。之れに反して奢那教及び佛教に在りては、最初から獨創的であつて、而して僧院の設があつた。斯かる差違に因る必然の結果の一として擧ぐべきは、現代に於て吾人の目に觸れる古代の銘碑は、大抵奢那教徒及び佛教徒によつて作られたものであつて、波羅門教徒の手に成つたものは、殆んど之れを認めないことである。波羅門教の古代史中に、證據とすべき重要なる事例が比較的缺乏せるために、觀察が自から一方面に偏するが、此の缺陷を補ふには、文學研究を以てせねばならぬ。

波羅門教にて用ふる言語は、何れの土地に於ても常に梵語は限られて居る。然るに奢那教徒及び佛教徒所用の經典の言語に在りては、各聖典が屬する特殊の時代と地方とに由つて必しも同一ではない。

紀元第十二世紀の末期に至りて、佛教は、印度本國では全く消滅したが、尚ほ南端及び北端の地方即ち尼波羅と錫蘭とに流布して居つた。佛教は其の本土から遠かに隔つた東方亞細亞にまで流傳した。佛教の古典は、四種の集籍を以て保持されて居る、即ち巴里語にて綴つたものは、錫蘭、ビルマ、暹羅に行はれ、梵語の經典は、尼波羅國にて用ひられ、西藏譯典籍は西藏に、漢譯の經文は支那及び日本に廣布して居る。

斯くの如く、奢那教と佛教とは、等しく印度の同一地方に興起し、且つ流布したの

である。其れは即ち往古のコサラ、ヴイデア及び摩竭陀等諸王國を含有する中印度の東部地方であつた。是れ西部ベンガルのチルフート及びセントビハールの昔の諸州を集合した近世のオウドに當るのである。斯樣にして遂に他の諸地方に普及し、多年間波羅門敎と共に印度の所領を分つた。

兩敎から世間並に出世間の種々の大文學を生じたが、是等は歷史の立脚地から觀て、特に價値あるものである。而して該文學中には、兩敎相互の間に於ても、又波羅門敎との間に於ても、獨創に成つた諸傳說が表はされて居る。故に其れは波羅門敎徒、耆那敎徒及び佛敎徒以上三種の顯著なる文學の源流によつて支へられたことは、當然信じ得る處である。然かも如上の三敎相互の間には、依據の痕跡なきこと亦殆んど確實である。然るに史家が、是等の材料を取扱ふに際して、最も困難を感ずるのは、現存せる是等の典籍が何れも原本にあらずして、後世の譯述であることに存する。而して其の叙述に於て、增補訂正若くは聖文の損缺に由る變異が、何邊にまで及んで居るかは決定し易からぬ問題である。

前記の特徵の殊に著しいのは、波羅門系に屬する經典である。例へばマハバラータ、ラマヤーナ及びプラナ即ち「古代話傳」の如き往古の叙事詩に於て、其の現存せる形式たるや、之れに記錄されるべき事實の起つた時代から、遙かに後に成つたものたることは疑ふべき餘地がない。故に是等を論述の根據とするには、充分の警戒を加へなければならないのである。乍去、其の表現の樣式こそ、年代の經過に伴つて、著しい變化を生じて居るが、其の所說の實質に至りては、全然古代のものたることは勿論である。

マハバラータ即ちバラータ降來の大詩歌と稱せられるものは、各三十二綴を以て成る對句約拾萬句に及ぶものであつて、若し其の綴(シレヤブル)の數を以て算定すれば、ミルト

ンの「失樂園」に比して殆んど三十倍の長さに達するのである。此の詩の第五節のみには、主なる話即ちクルスとパンヅスとの戰爭に關することを述べてある、其の他にはすべて種々の挿話（エピソード）、別途の談話、又は哲學思想を有する詩句を以て形成して居る。現存せるが如きマハバラーターは數世紀間に亘つて、作成されたものであることは疑ひ得ない。而して批評は、其の發達に於ける種々の異なつた狀態を判別し、其の各の年代の概定を示すことに於て成功して居る。前掲の談話たるや、有名にして然かも傳記の世に顯れて居ないクルスとパンヅスとの間に演ぜられた實際の戰爭を、歷史的根本資料としたものであつて、而して現存せるマハバラーター核心を形成せる叙事詩は晩くも紀元前第四世紀頃に、更に遠い昔に起つた事件に基く傳說的の戰ひの歌から成つたものであることは、吾人の首肯する處である。

斯くの如くマハバラーターは、本來、中印度に屬するものであるが、ラマヤーナーの方は此の地方の東部に在る部內に屬して居る。其の名稱によつて知られる如く、該書は、コサラのイクシユヴアク王家の王子ラマの傳を稱說したもので、其の編の女主人公は、ヴイデア王ジヤナカの王女であつて、ラマの貞淑なる妻たるシイタアである。ラマヤーナーは、マハバラーターと異なりて、其の製作は全部同一時代にして、然かも同一作家ヴアルミキの手に成つたもの〻如くである。後世の補入が全然ないではないが、重なる詩は全部同一樣である。製作時代に就いては、恐く紀元前第四又は第三世紀に成つたものと思はれるのである。既に考察した如く其の文字の或るものは更に古代的であつて、優婆尼沙土に記述されたもの〻如くである。

古代の叙事詩が、少くとも其の起源から觀て、波羅門種よりも、寧ろ刹帝利種に屬することは疑ふべからざる事實である。其の背景となれるものは、宮廷及び戰場にして、重なる題材は、王や勇士の言行である。其の宗教は、王族の信奉するものである